

あまんだん ひがしさわ
天段古墳・東沢遺跡

発掘調査報告書

1989

掛川市教育委員会

あまんだん ひがしさわ
天段古墳・東沢遺跡

発掘調査報告書

1989

掛川市教育委員会

序

ここ数年来、全国各地において、ふるさとの心を生かす機運がたまつてゐるなかで、文化遺産を大切にする動きが広まりつつあることは、大変喜ばしいことであります。

文化遺産は過去において人々がさまざまな生活に直接、あるいは間接にかかわり、生活環境を形づくってきた歴史的要素の一つであることは言うをまたないところであります。

掛川市においても、生涯学習都市として着実にその発展の歩みをみせているなかで、徐々にではありますが郷土の歴史や文化を大切にしながら各種の事業が進められております。

遺跡が所在する土地は、地形的に優れており、遺跡にかかわりなく他の目的のために利用され、また、開発などの対象となる場合が多くなってきております。

このたびの発掘調査は土所有者の深いご理解によって、周到な準備を経て実施されました。発掘調査は慎重に行われ、その結果、掛川市域には数少ない横穴式石室墳が2基のほか、弥生時代の土墳なども発掘され、玉類、須恵器などが出土しました。これらの、資料は、掛川市域における弥生時代から古墳時代にかけての墓制や社会を知る貴重な資料であることが明らかになりました。

地道な発掘調査の成果を積み重ねて、先人の生活や社会を解明することは、私たちの生活が祖先の築いた文化遺産の基盤のうえに成り立っており、将来の文化的創造のために、また、自然環境や歴史的環境に十分配慮した潤いのあるまちづくりのために大切なことではないかと思います。

最後に本書の刊行にあたり、関係者各位のご協力とご指導に対し厚くお礼申し上げます。

平成元年3月吉日

掛川市教育委員会

教育長 西ヶ谷 兔志雄

例　　言

1. 本書は、昭和63年12月3日から平成元年3月31日まで実施した静岡県掛川市家代字東沢665-1-2に所在する天段古墳・東沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、茶園改植に伴う緊急発掘調査で、調査費用の1/2を国、1/4を県の補助金を受け掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際しては、土地所有者の山崎美夫氏をはじめ周辺土地所有者の方々には、埋蔵文化財に対し多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 発掘調査は、掛川市教育委員会の前田庄一・戸塚和美が担当した。
5. 発掘作業ならびに整理作業には次の方々の参加を得た。
永島光男・山本春夫・加藤正雄・田旗光・鈴木きり・鈴木ひで・山崎まち・山崎すぎ・鈴木静江・石亀まつ・松浦せい子・高柳きわ・井野鈴江・松井しが・鳥居鈴江・鈴木辰江・鈴木はつ子・鈴木きの・村松さと・松井田鶴子・田旗みなみ・博松房子・橋本重子・山崎美恵子・中山貞子
6. 現地調査ならびに本書作成にあたっては、次の方々から御教示・御協力を得た。ここに記して感謝の意を表したい。
市原壽文教授・川江秀孝氏・足立順司氏・吉岡伸夫氏・松井一明氏・木佐森道弘氏
7. 本書の執筆・編集は前田庄一が行ったが、第20図-29~33の土器の実測・トレースは掛川市教育委員会の戸塚和美氏にお願いした。
8. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長西ヶ谷兔志雄、社会教育課長安達啓、社会教育課専門官岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
9. 調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 掲図における方位は、磁北を示す。(1988年12月現在)
2. 本書で使用した遺構名称は次の意味である。
S F : 土壙　　S X : 性格不明な遺構
3. 本書で使用した遺構番号は、現地調査時のものをそのまま使用した。
4. 天段1号墳石室実測図中の原点とは、石室実測用に主軸ライン上に設定したものである。
5. 遺物の番号は、掲図と写真図版と同一である。

目 次

序	
例言	
凡例	
I 発掘調査と遺跡の概要	2
1. 調査に至る経緯と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 遺跡をめぐる環境	5
i) 地理的環境	5
ii) 歴史的環境	5
II 調査の内容	6
1. 遺構	6
i) 横穴式石室墳	6
ii) 柱穴状遺構	24
iii) 土壙	28
iv) 性格不明な遺構	29
2. 遺物	30
i) 土器	30
ii) 玉類	33
iii) 鉄釘	33
III まとめにかえて	34

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第2図	遺構全体図	3
第3図	天段1号墳実測図	7
第4図	天段1号墳・2号墳墳丘断面図	8
第5図	1号墳天井石実測図	10
第6図	1号墳石室展開図	11
第7図	1号墳玄室内山茶碗実測図	13
第8図	1号墳玄室内出土遺物実測図	15
第9図	1号墳棺台石・鉄釘実測図	16
第10図	1号墳閉塞石実測図	17
第11図	1号墳根石実測図	19
第12図	1号墳石室土層断面図	21
第13図	1号墳石室側壁実測図	22
第14図	1号墳石室掘方実測図	23
第15図	2号墳実測図	25
第16図	2号墳主体部掘方実測図	26
第17図	土壤実測図	27
第18図	S X01実測図	29
第19図	出土土器実測図（1）	31
第20図	出土土器実測図（2）	32
第21図	出土玉類実測図	33
第22図	1号墳出土鉄釘実測図	33

図版目次

- 図版Ⅰ 上 天段古墳・東沢遺跡調査前全景（南より）
下 天段古墳・東沢遺跡全景（南より）
- 図版Ⅱ 上 天段1号墳石室内天井石検出状況（奥壁方向より）
下 天段1号墳石室内遺物出土状況（南より）
- 図版Ⅲ 上 1号墳石室全景（南より）
下 1号墳石室全景（南より）
- 図版Ⅳ 上 1号墳石室内根石全景（南より）
下 1号墳石室掘方全景（南より）
- 図版Ⅴ 上 1号墳全景（南より）
下 1号墳（手前）・2号墳（奥）全景（東より）
- 図版Ⅵ 上 天段2号墳石室掘方全景（南より）
下 天段2号墳全景（東より）
- 図版Ⅶ 上 SF01～SF05全景（東より）
下 土壙・ピット群（東より）
- 図版Ⅷ 上 1号墳玄室内掘削風景（左壁方向より）
中 1号墳玄室内土層断面（玄門方向より）
下 1号墳玄室内山茶碗出土状況（右壁方向より）
- 図版Ⅸ 上 1号墳玄室内遺物出土状況（奥壁方向より）
中 1号墳奥壁より棺台石（玄門方向より）
下 1号墳玄門より棺台石（奥壁方向より）
- 図版Ⅹ 上 1号墳玄室床面状況（玄門方向より）
中 1号墳玄室右壁（玄門方向より）
下 1号墳玄室左壁（玄門方向より）
- 図版Ⅺ 上 1号墳奥壁部分（玄門方向より）
中 1号墳奥壁裏土層（玄門方向より）
下 1号墳奥壁根石（玄門方向より）
- 図版Ⅻ 上 1号墳右壁玄門（南より）
中 1号墳右壁玄門掘方（東より）
下 1号墳左壁玄門（南より）
- 図版Ⅼ 上 SF02内遺物出土状況（南より）
中 SF01・02・03全景（南より）
下 SF06全景（南より）
- 図版Ⅽ 出土遺物（1）
- 図版Ⅾ 出土遺物（2）
- 図版ⅯI 出土遺物（3）



遺跡地名

1. 天段古墳
2. 長福寺古墳群
3. 宮坂横穴群
4. 古戦横穴群
5. 捕ヶ谷横穴群
6. 海塚古墳群
7. 小高古墳
8. 石ヶ谷古墳群
9. 美人ヶ谷古墳群
10. 平塚古墳
11. 甚佐ヶ谷横穴群
12. 堂前横穴群
13. 十五ヶ谷横穴群
14. 別所横穴群
15. 鰐原横穴群
16. 岩谷横穴群
17. 梅ヶ谷横穴群
18. 西谷田横穴群
19. 三十八坪横穴群A群
20. 山麓山横穴
21. 宇洞ヶ谷横穴
22. 岡津横穴群A群
23. 岡津横穴群B群
24. 本村横穴群A群
25. 本村横穴群B群
26. 上山古墳群

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経緯と調査の目的

掛川市教育委員会では、国および静岡県の補助金を得て昭和56年度から昭和58年度にかけて市内に所在する遺跡の分布調査を行い、市内に分布する遺跡の確認とそのあり方について検討を加えた。そしてその成果品である「掛川市遺跡地図」と「掛川市遺跡地名表」は、その後急増している開発行為に対応する形でも、その利用価値の高いものとなっている。しかし、埋蔵文化財の性格上その調査時に未発見であった遺跡も数多く、開発行為の工事中に偶然発見される遺跡がある。

ところで毎年早春の頃という時期は、茶所にとって畑造成のための機械が動きだす時期にあたり、その下に埋蔵する遺跡に思わぬ被害をもたらす時期もある。

今回調査の対象となった天段古墳群および東沢遺跡の場合が、これまで説明してきた状況の中で新たに発見された遺跡であった。昭和62年の2月、これまで遺跡地図に示されていなかった掛川市家代地内(つまり今回の調査地点)において、「茶園改植のために機械を入れ、開墾中に何か大きな石がたくさん出てきたので、是非見に来て欲しい」との連絡を受け、掛川市教育委員会が急行し現地を確認したところ、これまで未発見であった横穴式石室の古墳が半分近くを切り崩され露頭していることを確認した。そしてその足で土地所有者に会い、古墳の重要性を話し理解を求めた結果、これから植える茶樹苗を用意していたにもかかわらず、調査することに快く承諾していただいた。こうして、国および静岡県の補助金を得る算段をし、記録保存を目的とした発掘調査が行われることになった。

2. 調査の方法と経過

発掘調査は、人力によるトレンチ掘削から開始した。その後、調査区内の耕作土を重機を用いて除去した。調査中に、調査区の南端で古墳の一部(天段2号墳)を検出したので、この古墳上の排土を人力で移動して、調査区域の拡張を図った。

調査にあたっては、調査区の形に合わせて5m方眼のグリッドを設定することとし、磁北より11°48分50秒西に振れるラインを南北軸とした。これに直交する東西軸を調査区の南端と北端の両端から5mずつ設定したために、D区は、南北方向に5.548mを測る変則的なグリッドとなってしまった。

現地での図面作成は、石室内は10分の1、他の遺構は20分の1と10分の1を併用した。また、写真撮影は、6×7カメラ1台と35mmカメラ2台(白黒用とリバーサル用)を用いた。

調査の経過は以下の通りである。

昭和63年12月3日～12月10日 トレント設定・掘削

12月8日～12月17日 重機による耕作土の除去と排土の移動

12月13日～12月27日 天段1号墳墳丘上の耕作土除去、周溝掘削、S X 01掘削

昭和64年1月5日～平成元年1月14日 天段1号墳石室内掘削、天段2号墳上の排土の移動

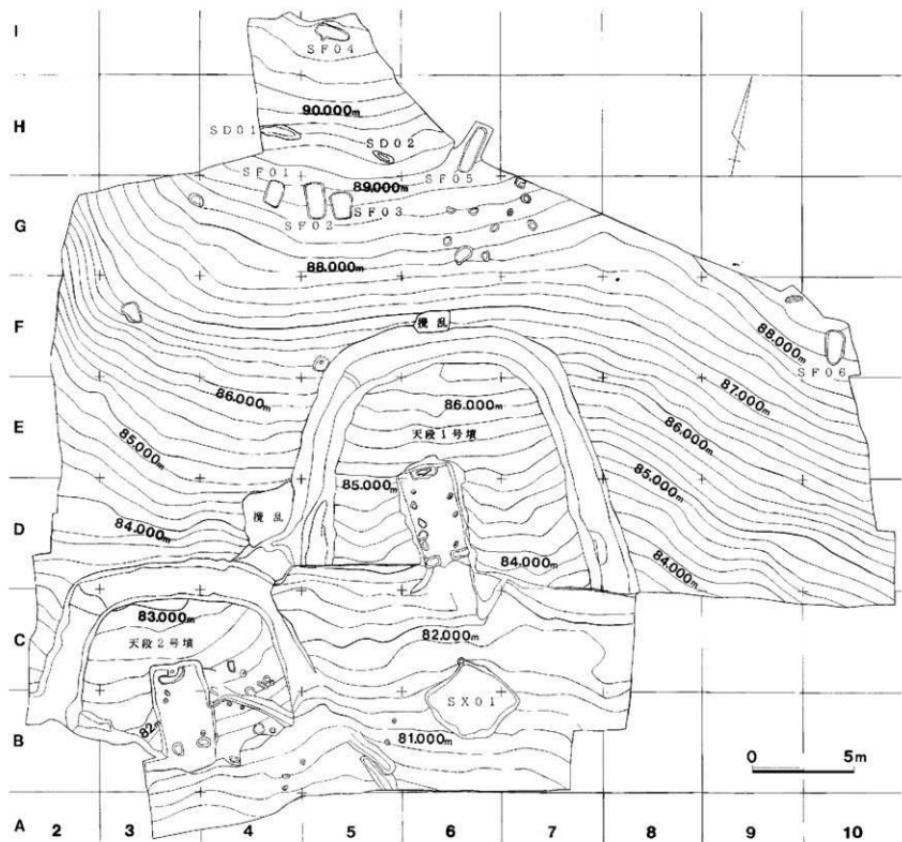
1月17日～1月28日 天段1号墳天井石の排除、天段2号墳上の排土の移動

1月30日～2月10日 天段1号墳石室内清掃、天段2号墳主体部完掘、土壤掘削

2月13日～2月18日 天段1号墳石室展開図作成、天段2号墳平面実測

2月20日～3月4日 天段1号墳石室分解、調査区内写真撮影、平面実測

3月6日～3月18日 発掘調査器材の撤収、天段1号墳石室内・土壤内覆土ふるいかけ



第2図 遺構全体図

3. 遺跡をめぐる環境

i) 地理的環境

掛川市域の北部は、原野谷川をはじめとする中小河川により開析された谷が丘陵の奥にまで入り込んでいる。そのため、丘陵はあたかも手の指を広げたかのような形で小平野に張り出している。そして、この各々の指にあたる部分にも無数の谷がはいり込んでいるのである。

今回報告する天段古墳・東沢遺跡も、このような谷が無数にはいり込んだ丘陵上に位置している。

ii) 歴史的環境

前掲の第1図は、掛川市西半における後期古墳の分布図である。この分布図を基に、この地域の後期古墳について触れてみたい。

まず、今回報告する天段古墳は、家代川流域に位置する。この家代川流域には、十五ヶ谷横穴群(13)、別所横穴群(14)が分布する。このうち別所横穴群は、天段古墳の南約0.6kmに位置し、天段古墳から望むことができる。また、天段古墳からは、掛川市の南西部を一望できる。

原野谷川流域に目を移すと、中流域に甚佐ヶ谷横穴群(11)、堂前横穴群(12)があり、上流域には横穴式石室墳から成る長福寺古墳群(2)と宮坂横穴群(3)、古戦横穴群(4)、楠ヶ谷横穴群(5)の横穴群が存在する。この原野谷川上流の横穴は総数100基以上にのぼるものと思われ、市内では垂木川中流域、逆川南岸の高御所と並ぶ横穴の群集地区である。

垂木川の中流域には、鰐原横穴群(15)、岩谷横穴群(16)がある。この中流域の横穴群から約2km上流には、横穴式石室墳から成る海塚古墳群(6)が存在する。

倉真川の中流域には、三十八坪横穴群A群(19)、西谷田横穴群(18)、梅ヶ谷横穴群(17)がある。上流域に向かうと、まず独立丘陵上に単独で築かれている横穴式石室墳の平塚古墳(10)、さらに奥に、小高古墳(7)、石ヶ谷古墳群(8)、美人ヶ谷古墳群(9)という横穴式石室墳から成る古墳群が築かれている。

市街地の南西部、逆川南岸の小笠山北麓には、本村横穴群A群(24)、本村横穴群B群(25)、その他に大谷代横穴群、十二ヶ谷横穴群等の横穴群が分布している。この横穴群集地帯の西端に横穴式石室墳から成る上山古墳群(26)が存在する。また、逆川をもう少しあかのぼれば、単独で存在し、豊富な副葬品をもつ山麓山横穴(20)、宇洞ヶ谷横穴(21)が存在する。

以上が各河川の流域別にみた後期古墳の概略であるが、横穴に比べ横穴式石室墳から成る群集墳の数が少なく、また群集墳を構成する古墳の数も少ないことがわかる。

こうしてみると、家代川、垂木川、倉真川では、中流域に横穴が分布し、上流域に横穴式石室墳が分布するというよう、石室墳と横穴の分布域が分けられるのであるが、これは地質的な要因によるものと思われる。つまり、堆積砂の露頭がみられるところでは横穴が築かれ、石室を築くに足る石材が入手できるところでは石室が築かれたと考えられる。これらの横穴、石室墳のうち築造時期の判明するものは、別所横穴群、岩谷横穴群、小高古墳があるが、これらは、6世紀末葉から築造を開始している。この6世紀末葉という時期は、遠州地方における群集墳の初現期の時期であり、掛川市域にあっても遅れることなく群集墳が築造されはじめたことが窺われる。掛川市内では、横穴式石室とドーム形横穴、尖頭形横穴という3種類の墓制が採用されたのである。

《参考文献》

(1) 掛川市教育委員会編 『掛川市遺跡地図・掛川市遺跡地名表』 1982

(2) 平野吾郎他 『遠江の横穴群本文編』 静岡県教育委員会 1983

II 調査の内容

調査前は、横穴式石室を内部施設とする古墳1基と弥生時代の集落の存在が予想された天段古墳・東沢遺跡は、調査の結果、横穴式石室墳が2基、柱穴状遺構多数、土壙6基、性格不明な遺構1基を検出できた。

また遺物の点では、横穴式石室内からの須恵器・土師器・玉・鉄釘、土壙内からの土器・玉類の出土という成果を得ることができた。

ここでは、今回の調査におけるこれらの成果を遺構、遺物の順で概略を述べたい。

1. 遺構

ここでは、今回の調査によって検出した遺構を、横穴式石室、柱穴状遺構、土壙、性格不明な遺構の順でその概要を記す。

i) 横穴式石室墳

横穴式石室墳は合計2基検出された。まず、今回の発掘調査のきっかけとなった調査区中央の天段1号墳、そして表土剥ぎ後に1号墳の南西で検出された天段2号墳である。

ここでは、天段1号墳、2号墳の順に記述を進める。

天段1号墳（第3図）

天段1号墳についての記述は、立地、墳丘、周溝、内部施設の順で概要を記す。

1) 立地

今回の調査地は、標高80m～90mを測る南面する丘陵の斜面である。この調査区内を細かく見るとD-4区・E-4区・F-4区・G-5区・H-5区から西と、D-9区・E-9区・F-9区から東が高くなっている、この間は小さな谷がありこんでいて、堆積土である黒色土が分布していた。

天段1号墳は、この小さな谷の最奥部に築かれた古墳であり、周溝および石室は黒色土を掘り込んでいた。

2) 墳丘（第4図）

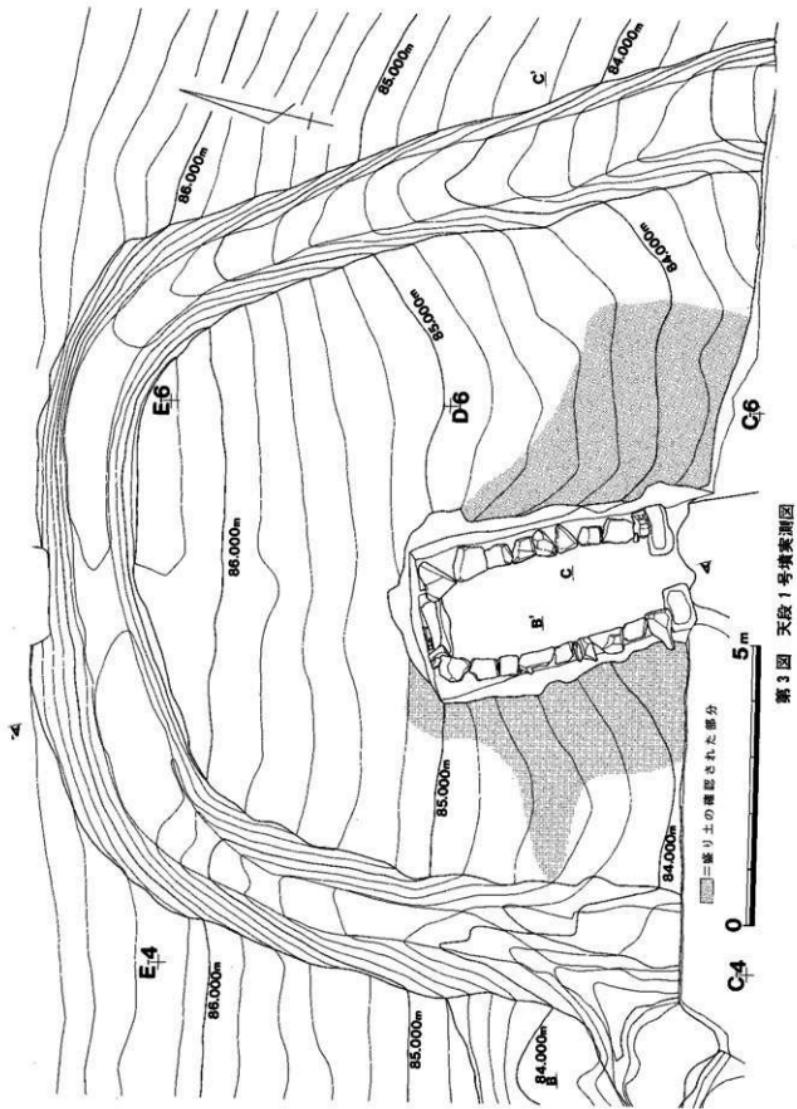
この古墳の墳丘は、茶園耕作および改植による擾乱を受けていた。また、古墳自体も築道部まで削り取られていた。墳丘上は擾乱を受けているとはいえ、石室掘方より北では盛り土の痕跡は全く見出せなかった。このことより、墳丘上の盛り土は石室掘方以南に限られていたと考えられ、古墳は、周溝を開削し、墳丘に当たる部分をわずかに掘り下げることによって傾斜を緩やかにしただけの簡単なものであったと考えられる。

次に石室掘方以南で確認された盛り土について簡単に触れておく。

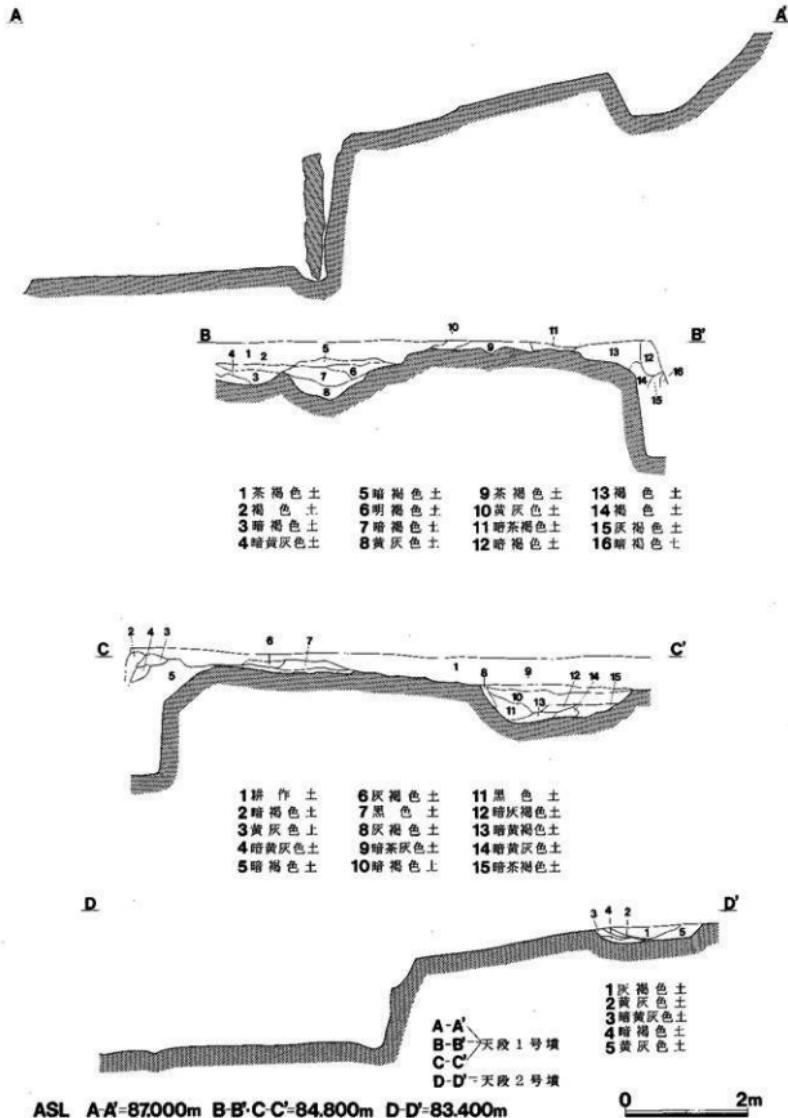
第4図B-B'は、石室の西側で確認された墳丘の土層断面である。盛り土の一部は耕作土（11層）により削り取られているが、地山の上に盛られた茶褐色土と黄灰色土を確認できた。茶褐色土中には、直径約1cmの灰色粘板岩のブロックが比較的多く混じり、固くしまる。また、黄灰色土中には、直径約1cmの灰色粘板岩のブロックが充填し、非常に固くしまっていた。これは、9層の上によくしまった10層を盛ることにより、墳丘の崩落防止を意図したものと思われる。

このような墳丘端部の盛り土は、石室東側の墳丘上ではみられなかった。

第4図C-C'は、石室の東側で確認された墳丘の土層断面である。墳丘の東半分は堆肥混じりの耕



第3図 天段1号埋査測図



第4図 天段1号墳・2号墳墳丘実測図

作土が地山面（黒色土）まで及んでおり盛り土は確認できなかった。墳丘上の西半分では、地山の上に石室掘方内から続く暗褐色土（直径0.5cm～1cmの灰白色粘板岩のブロックが多く混じる）が約8cmの厚さで盛られ、さらにその上に直径約1～2cmの灰白色粘板岩のブロックがごく少量混じる黒色土（7層）が約20cmの厚さで残存していた。この黒色土も、耕作土及び灰褐色土（擾乱）による擾乱を受けているため広がりは確認できなかった。

現存の古墳の規模は、東西方向において、墳丘上では約13m、周溝の内側の下場間では約15m、周溝の外側から外側では約17.8mを測る。南北方向は、周溝の外側から削り取られたところまで約12m分が残存していた。

3) 周溝（第4図）

周溝は、残存する墳丘をとりまく形で検出された。検出された周溝のうち、墳丘の北側部分は緩く弧状を描くが、西側と東側は直線的に伸びる形状であった。

天段1号墳・2号墳が完存していたならば、1号墳の西側周溝と2号墳の東側の周溝は切り合い関係にあったのではないかと思われる。

墳丘の北側の周溝は、確認面の幅約2.4m、深さは斜面側からでは約1.4m、墳丘上からは約0.7mを測る。形状は、墳丘側の壁面は約60°の角度で立ちあがり、斜面側は約40°の角度で立ちあがる。底面は幅約0.7mの平坦面を有する。周溝内の覆土は、底面上約0.25mまで黄灰色土（直径0.5cmの灰色粘板岩のブロックが充填する）が堆積しており、その上に有機質を帯びる暗褐色土、褐色土、明褐色土が堆積していた。

墳丘の西側では、E-4グリッドポイントの東側で約0.15mの段差がつく。さらに、D-4グリッドポイント附近では、周溝底面の西端に幅約0.25m、深さ約0.1m、断面逆台形の溝が現われる。調査期間中の降雨時には、雨水がこの狭い溝を流れ下っていたことから考えると、往時の雨水がこの溝を作ったのかも知れない。

B-B'間では、確認面の幅約2.1m、深さは墳丘端部の地山面から約0.9mを測る。壁面は、墳丘側では約30°の角度で立ちあがる。斜面側は時期不明の擾乱（1～4層）によって底面から約0.35mの高さでこわされているが、約50°の角度で立ちあがるものと推定される。周溝内の覆土は、底面上約0.2mまで直径0.5cmの灰色粘板岩のブロックが充填する黄灰色土（8層）が堆積し、その上に暗褐色土（7層）、明褐色土（6層）、暗褐色土（5層）が堆積していた。

墳丘の東側C-C'間では、確認面の幅約2.5m、深さは斜面側では約0.5m、墳丘端部の確認面からは約0.65mを測る。壁面は、墳丘側では約50°の角度で立ちあがり、斜面側は約30°の緩やかな立ちあがりになっている。底面は幅約1.2mの平坦面を有する。周溝内の覆土は、底面上に直径約0.3cmの灰白色粘板岩のブロックが多く混じる暗黃褐色土（13層）、直径2～3cmの灰白色粘板岩のブロックが充填する暗黃褐色土（14層）、灰白色粘板岩のブロックがほとんど混じらない暗茶褐色土（15層）が堆積し、その上に黑色土（11層）、直径約1cmの石が少し混じる暗灰褐色土（12層）、さらに約0.2mの厚さで直径約1cmの石が少し混じる暗褐色土（10層）、直径約1cmの石が少し混じる暗茶灰色土（9層）が堆積していた。

4) 内部施設

a) 天井石（第5図）

玄室内の奥壁から約1.4mの地点から約3.4mの地点までの2m間で、すでに側壁上から落下した状態であったが、3枚の天井石が検出された。

これら3枚の天井石は、石室の床面から約0.55m～0.75mの高さであった。（第12図C-C'参照）

最も奥の天井石は、幅約1.1m、長さ約1.3m、厚さ約0.3m、断面形は長方形を呈する。

中央の石は、幅約0.4m、長さ約1.45m、厚さ約0.3m、断面形は台形を呈す。

最も玄門寄りの石は、幅約0.55m、長さ約1.3m、厚さ約0.4m、断面形は平行四辺形を呈する。

この3枚の天井石は、奥壁と同じシルト質の石であった。

最も奥壁寄りの天井石の東端は左壁の下にはいり込んでおり、中央の石は、西端・東端とも側壁の下にはいり込んでいた。

これは、天井石落下後に側壁が玄室内にせり出したためと思われる。

これらの天井石が位置する部分の両側壁の根石間の距離は1.55～1.65mを測り、天井石を載せるためには持ち送りが必要となる。この点について、第12図B-B'の地点（一番奥の天井石のほぼ中央部分）で復元を試みる。

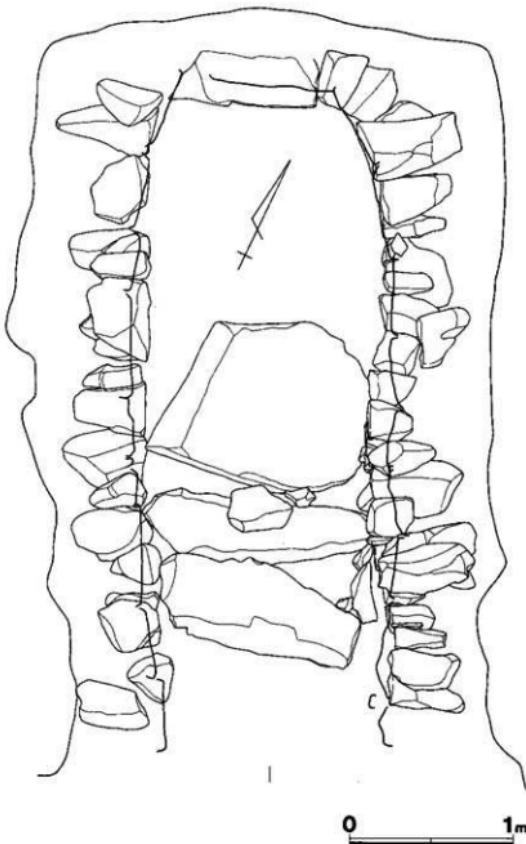
右壁の現存の持ち送りの角度（約7°）、左壁の現存の持ち送りの角度（約9°）で奥壁の上端の高さまでもってくると両側壁

間の距離は約1.1mとなり、天井石の長さが約1.3mであるから、かろうじて載せることができる。

さて、これらの天井石が落下した時期について考えてみたい。

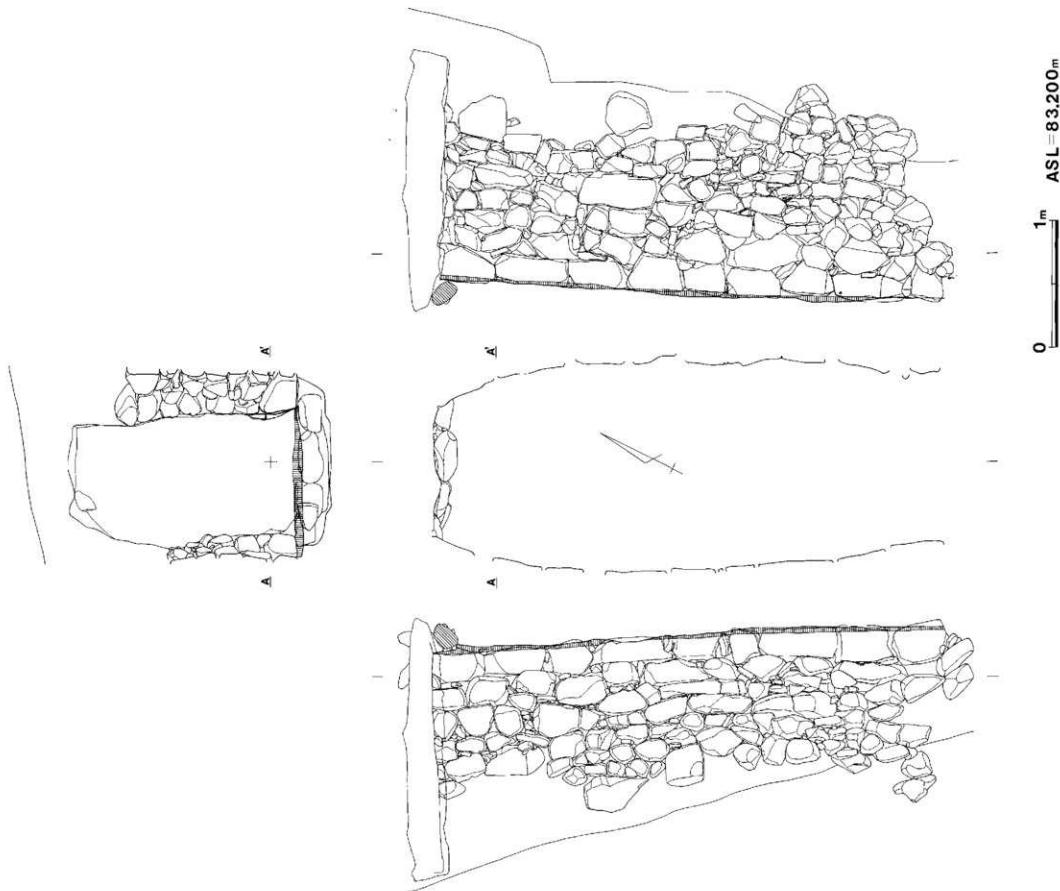
玄室の奥壁寄りの天井石が検出されなかった（厳密に言えば、幅約0.6m、長さ約1.3mの天井石と思われる石が1枚検出されたが、原位置を保っていないかった）部分の下から平安時代末に比定できる

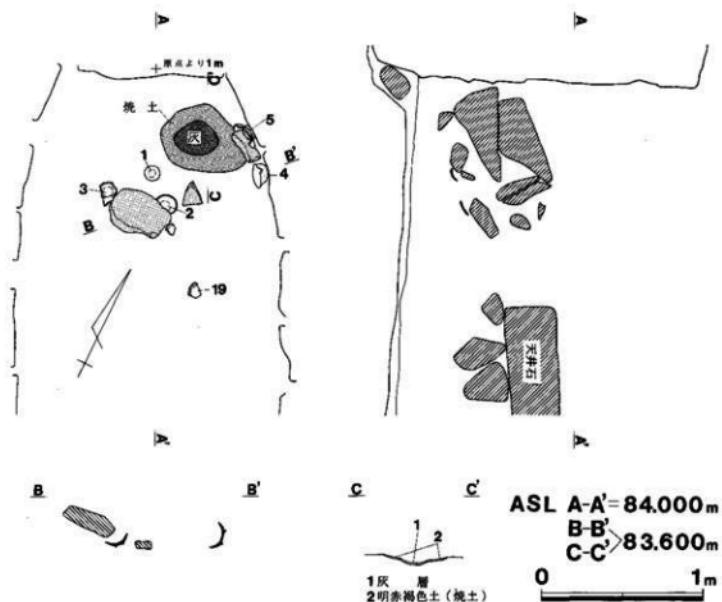
十原点



第5図 1号墳天井石実測図

第6图 1号填石室断面图





第7図 1号墳玄室内山茶碗実測図

山茶碗・小碗が出土した。このことは、天井石を取り去って侵入したことを意味しているのであり、平安時代の末にはすでに天井石が落下していたことを示している。

b) 石室の再利用（第7図）

前項の「天井石」のところでも触れたが、奥壁から約1mの範囲で古墳時代の床面より約0.25m上から山茶碗4個体・小碗1個体・土器師壺?の破片が出土した。また、奥壁から約0.15mから0.6mの範囲で、長径約0.55m、短径約0.4mの焼土が検出されたが、この焼土の上面のレベルと陶器の最低点のレベルはほぼ同じであった。

焼土の中央には、長径約0.3m、短径約0.2mの範囲で灰が認められた。焼土（明赤褐色土）中には、長さ0.3cmほどの炭が混入していた。この焼土と灰の断面を見ると、周辺部が高く、中央の灰の部分がすり鉢状にくぼんでいる。

焼土・灰の形成からこの場所で火を焚いたことが窺われるが、奥壁や左壁が火を受けて変色している様子は認められないため、火力は弱かったものと推定される。また、焼土も固く焼けしまるということがないため、短時間の燃焼であったと考えられる。

出土した山茶碗・小碗が大きく傾いていること、焼土・灰も中央部がくぼんでいるのは、この部分が陥没したためと考えられる。この点から、人間の埋葬を考えたいが、山茶碗・小碗の上には、無造作に投げ入れられた多量の側壁の石があるのが、葬送儀礼を考える場合に疑問点として残る。

C) 古墳時代の埋葬施設（第9図）

玄室の床面上に棺台石が設けられていた。棺台石は、奥壁から約0.15m～約1.5mの主軸ラインのやや左壁寄りと、奥壁から約2m～3.1mの右壁沿いで検出された。

奥壁寄りの棺台石は、長径約0.4m～約0.5mの偏平な礫と長径0.2m前後の礫4点から成る。このうち最も奥に位置する直径約0.4mの礫は、上面が傾いていることと、礫の下から鉄釘が出土していることの2点から、原位置を保っているとは考えられない。さらに、この礫の上約5cmの高さで棺台石の一部であったと思われる長径約0.2m、厚さ約4cm～約5cmの偏平な礫2点が検出されていることからすれば、奥壁寄りの棺台石の数は、第9図に図示したよりも多かったものと思われる。奥壁寄りに残っていた棺台石は、平坦な礫の玄門寄りに3点の礫を並べ、後ろの平坦な礫の右壁寄りに尖った石を立てている構造である。

右壁沿いの棺台石は奥壁寄りの棺台石より旧状を留めている。棺台石は、長径約0.35m～約0.5mの礫3点と割り石から成る。この棺台石は、逆時計まわりの方向に礫を重ね、さらにこの礫の間に割り石を挟むことによって、互いの礫が動かないような工夫がされている。

この2つの棺台石の高低差は、右壁沿いの方が約5cm低くなる。棺台石間の距離は、中央部分から中央部分で約2mを測り、主軸方位はおおよそ磁北を指すものと思われる。

d) 遺物の出土状況（第8図・第9図）

土器は、第19図-6の壊蓋片（床面出土）と土師器片数点が石室中央の右壁沿いから出土した以外は、左玄門の内側部分で左壁に沿って出土した。

この左壁に沿って出土した土器群は、土器の最低点のレベルから大きく2群に分けることができる。ひとつは、床面上約2～3cmの高さから出土した第20図-20・21・22・23・25・28であり、もう1群は、床面より約5～8cm浮いた状態で出土した須恵器壊身・壊蓋（第19図-8～18）、土師器高杯（第20図-26・27）である。これより、須恵器高杯・長頸壺・土師器高杯（28）は横転・転倒が見られるが、ほぼ原位置を保っていると推定され、須恵器壊蓋・壊身等は片付けられた姿だと考える。

玉は、右壁沿いの棺台石の北側の床面から1点出土した。

鉄釘は、奥壁沿いの棺台石の周辺、右壁沿いの棺台石の周辺、右玄門の内側部分より出土した。第22図-3・8と図示しなかった1点の合計3点は床面からの出土であるが、他は床面より浮いた状態で出土している。鉄釘の位置から、木棺の大きさを推定しうるものではなかった。

e) 床面

棺台石、土器を取り除いた床面からは、土器片3点、玉1点、鉄釘3点と、直径5cm～10cm程度の割り石が数点検出された。

f) 閉塞石（第10図）

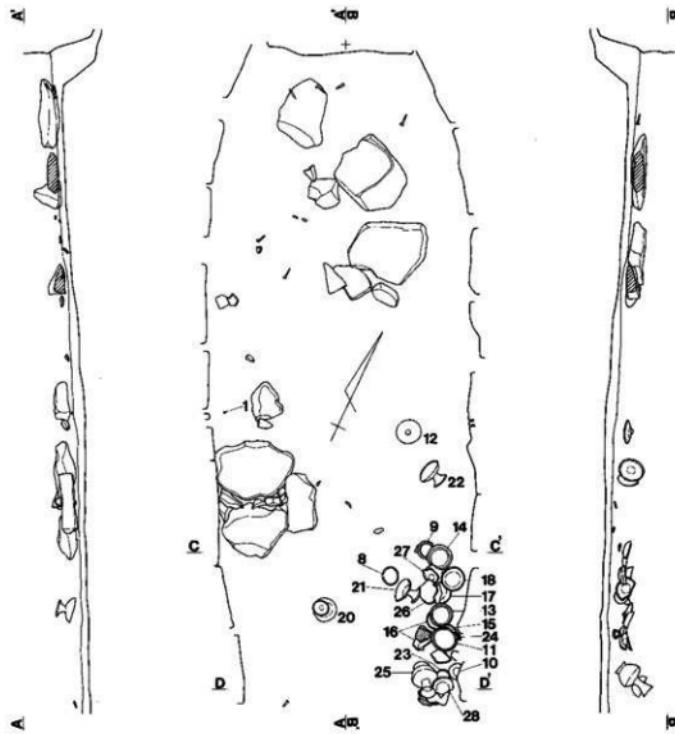
玄門内部から閉塞石の一部と思われる礫が10数点検出された。この礫の下から第22図-9の鉄釘が出土した。床面に密着した礫もあり、比較的早い時期に移動させられたものと思われる。

g) 赤彩（第13図）

赤彩された礫は7点発見された。右壁の奥壁より約0.85m～約2.6mの間、床面より約0.65m～0.85mの高さの礫4点と、左壁の奥壁際の床面より約0.9m～1.2mの高さの礫2点と、奥壁より約2.2mの地点で、床面より約0.35mの高さの礫1点に赤彩が施されていた。

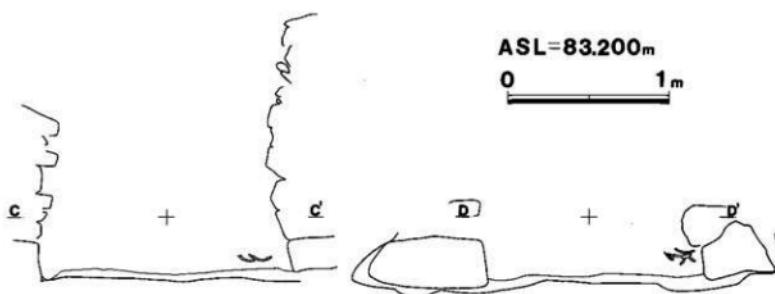
h) 石室掘方内土層（第12図）

石室掘方の左右両壁の外側の地山は、掘方に向かって斜めに削られている。これは、地山が玄門方向に傾斜していることと関係があるらしく、石室の石が地山上に出る部分が高くなるほど幅広く、深

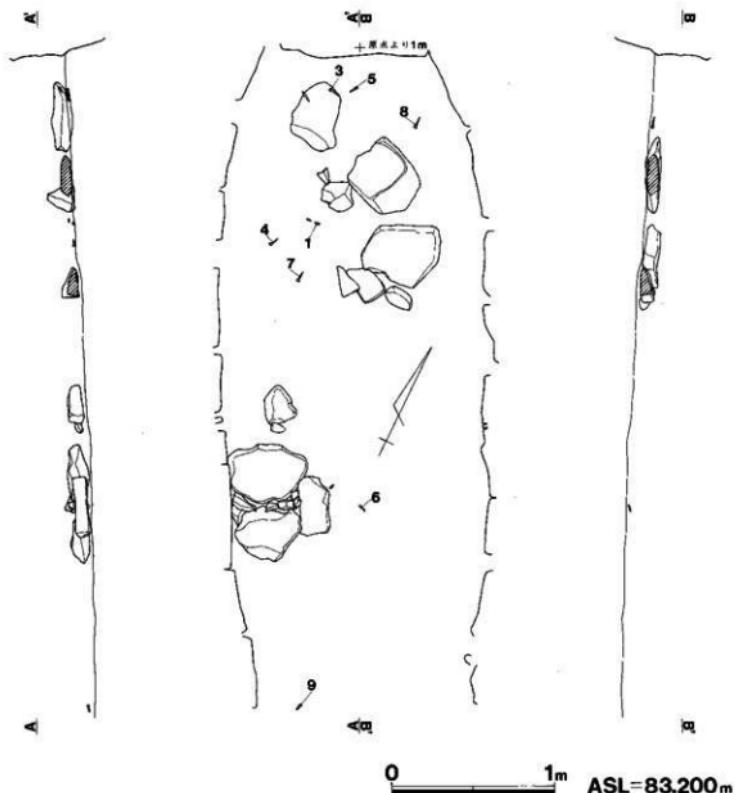


ASL=83.200m

0 1m



第8図 1号墳玄室内出土遺物実測図



第9図 1号墳棺台石・鉄釘実測図

く行われているようである。地山の掘方内に収まる奥壁部分の左右両壁ではほとんど行われず、玄門に近いC-C'の右壁では、幅約2.3m、深さ約0.4m、左壁では幅約1.1m、深さ約0.5mを測る。この傾斜部分は、石室の裏込め土が及んでいることから、裏込めと同時に埋められていったと思われる。

奥壁寄り、A-A'の右壁の9層～15層は、黄灰色土、暗黄灰色土、暗灰色土が版築状をなしている。左壁では、暗褐色土(17層)、黒褐色土(20層・22層)がサンドイッチ状に挟まれている。このA-A'間の裏込めは、1枚の層が薄く、版築状をなしており、丁寧に行われている。

石室中央部、B-B'の断面図の右側壁側の6層・8層は灰白色粘板岩が充填し、固くしまっている。右壁の掘方内は、黄灰色土と灰褐色土、暗褐色土が版築状をなし比較的固くしまる。左壁の21層・33層は灰白色粘板岩が充填していて固くしまるが、この間に挟まれた22層・23層・26層・27層・28層・

30層・31層は、1枚の層が厚く、しまりがなく柔らかい。

玄門寄り、C-C'の右壁では、A-A'・B-B'で見られた黄灰色土の互層は見られない。左壁の44層から47層は、灰色土と黄灰色土が版築状をなし、埋め戻しが丁寧に行われたことを示している。また、34層・35層・37層・40層は灰白色粘板岩のブロックが多量に混じる土で、固く丁寧に埋め戻されている。しかし、37層と44層に挟まれた部分の39層・41層はしまりがなく柔らかい土である。

掘方内の埋め戻しは、右壁と左壁の奥壁部分は、1枚の層が薄く、層序が版築状をなし、丁寧に行われているが、左壁中央から玄門寄りの部分では、1層が厚い上に、しまりがなく柔らかい土であり、粗雑である。これが、この部分の側壁が内側にせり出している一因であると考えられる。

i) 石室（第6図）

検出された石室は、羨道部及び左右の玄門石を重機で取られているが、両袖式の横穴式石室である。

石室の幅は、奥壁部分で約1.05m、中央部分で約1.6m、前壁部分で約1.35mを測る。玄門の掘方部分は約0.55mを測り、長さは、主軸ライン上で奥壁から前壁まで約4.05mを測る。石室の主軸方位は、N-26°-Wを測る。

奥壁（第6図、第11図）

奥壁は、最大幅約1.05m、高さ約2.1m、厚さ約0.3mを測る1枚の石で、石室の掘方いっぱいまで後ろにさげて据えられていた。奥壁の掘方は、幅約0.5m、長さ約1.35mを測り、この掘方の中央やや後寄りに約0.3m（床面から）埋められて立っていた。奥壁の下端近くは左右に張り出し、両側壁の根石の下に入れられていた。また、奥壁の前と左には円礫が詰められ、後ろには角礫が詰められていた。

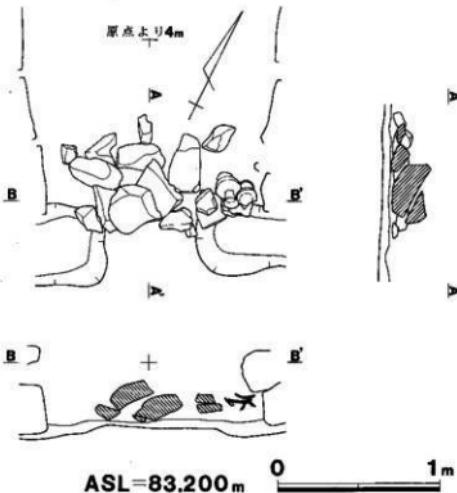
奥壁掘方内の底面は、奥壁の位置する所が根石の位置するところよりさらに一段掘り下げられていて、最深部は掘方上面より約0.25mを測る。

右壁（第6図、第13図）

右壁は床面より最高1.35mの高さまで遺存していた。

使用されている礫は、大きさが揃っていて積み方も整然としている。特に、奥壁に近い部分では、台形、三角形、平行四辺形の礫をうまく組み合わせており、礫間のすき間もなく、壁面の凹凸もみられない。壁面の下から2段目、3段目、4段目には偏平な細長い礫が多く用いられている。一方、奥壁より約0.85m～約1.8mの間の下から6段目、7段目には小礫が多く用いられている。

礫は、砂岩質の円礫とシルト質の角礫が併用されている。量的には角礫が円礫を上回る。



第10図 1号墳閉塞石実測図

側壁は、下から上までほぼ水平に積み上げられている。奥壁より約1.5mまでは大きな角礫が用いられ、奥壁の安定が図られている。

下から4段目までは横口積みが顕著で、5段目以上は小口積みが多く用いられている。

右玄門（第11図）

玄門石はすでに重機により抜き取られていたが、掘方と掘方内の玄門石を固定するための根石が残っていた。掘方は、幅約0.5m、長さ約0.9mの隅丸長方形を呈し、最深部は深さ約0.35mを測る。

根石の間には、幅約0.15m、長さ約0.3mの空間があり、玄門石のあった位置であろうと思われる。

左壁（第6図、第13図）

左壁は、床面より最高約1.7mの高さまで遺存していた。

礫は、さまざまな形のものが組み合わされているが、間にすき間がみられたり、凹凸があつたり、雑然としている。さらに、奥壁より1.9mあたりから玄門にかけては石室内にせり出しているのがわかる。このせり出している部分には小礫が用いられていて、右壁や左壁の奥壁に近い部分に用いられている偏平な礫は見られない。また、厚さ3cmほどの偏平な割り石が礫の間に挟み込まれているが、この割り石さえ、見た目を意識して、平らな面が石室内に向けられている。

石材は、砂岩質の円礫とシルト質の角礫が併用されるが、量的に角礫が円礫を上回っている。

側壁の積み上げは、右壁が下から上まで水平に積み上げられているのに対し、左壁は様子が異なる。左壁は、下から2段目までは水平に積まれているが、3段目からは異なる。側壁中央部分の3段目の礫を奥壁方向にたどると奥壁際では下から6段目に位置するのである。これは、2段目まで水平に積んだ後、奥壁に近い部分を優先して積み上げたことを示している。先述したせり出した部分はあと回しにされた部分であり、小礫が多用されているのもこのよう状況のためではなかろうか。

石材の積み方は、小口積みが顕著で、横口積みは右壁ほど多くはない。一方、小口を立てる例は、右壁では1例であったが、左壁では8例を数える。

左玄門（第11図）

玄門石はすでに重機により抜き取られていたが、掘方と掘方内の玄門石を固定するための根石が残っていた。掘方は、幅約0.5m、長さ約0.9mの隅丸長方形を呈し、最深部は深さ約0.3mを測る。

根石の中央に直径0.25mほどの空間があり、本来この位置に玄門石が存在したのであろう。

j) 根石（第11図）

右壁

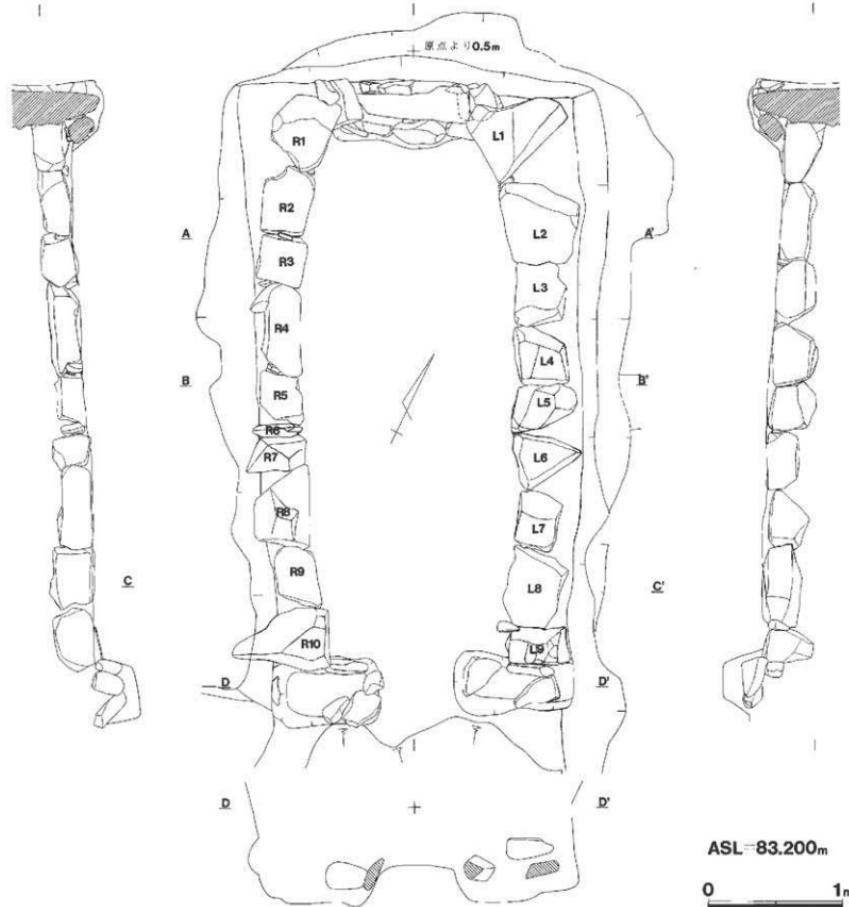
根石は横口面を石室内に向けて据えられるものが多い。並べ方は、礫間のすき間の存在により、R2-R1、R5-R4-R3、R5-R6、R8-R7-R6、R8-R9という部分的な確認にとどまるが、一方向から順に並べるというものではない。根石の掘方は検出されないものが多く、検出されたものでも、最深で約7cmを測るにすぎない。

左壁

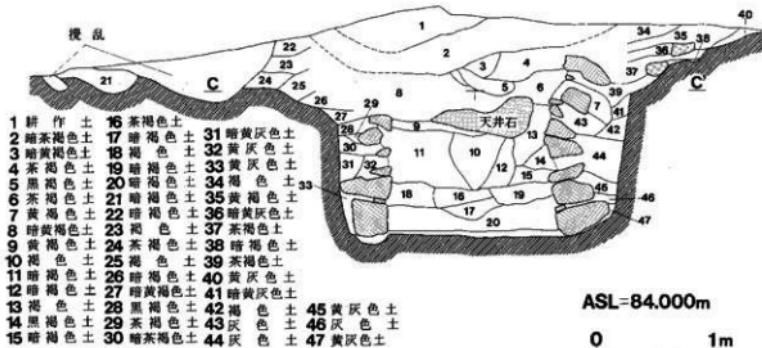
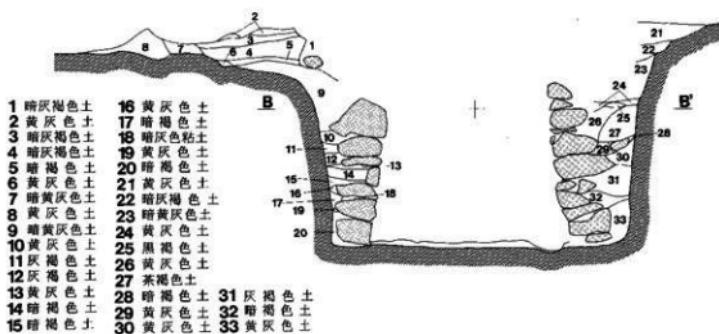
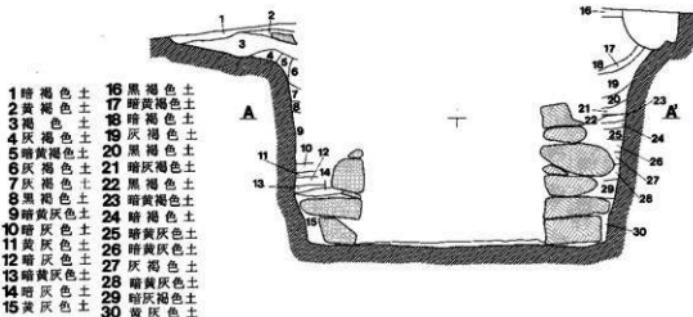
右壁同様、横口面を石室内に向けて据えられるものが多い。右壁の各根石の上面が平らであるのに比べ、左壁の根石の上面は傾斜をもつもの（L5、L9など）が多い。並べ方は、L2-L3、L4-L3、L4-L5、L8-L7の順序が認められる。根石の掘方は検出されないものが多く、検出されたものでも、最深で約4cmを測るにすぎない。

k) 掘方（第14図）

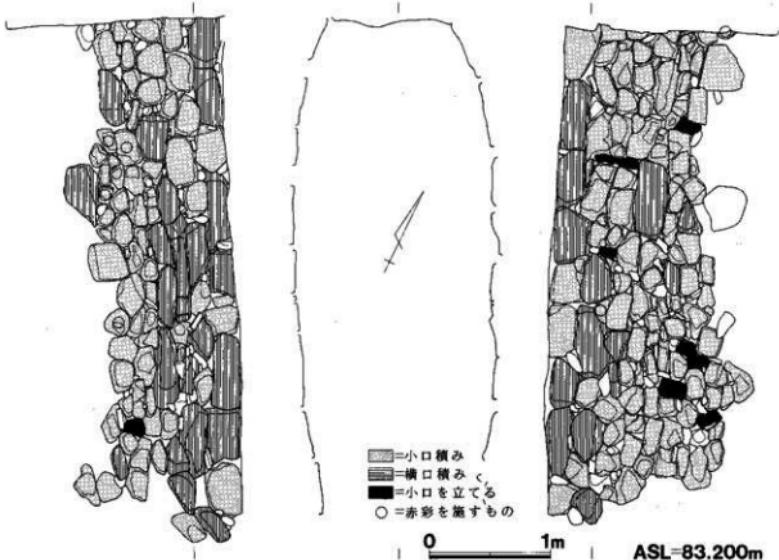
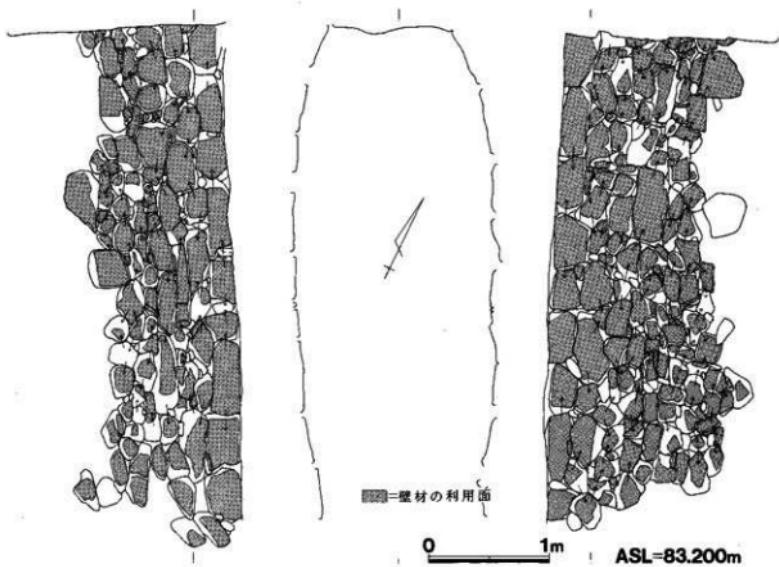
現存の掘方平面形は、整った長方形を呈する。掘方下場の奥壁と側壁の接する部分は稜角となり、下場から上場まで稜線が走る。



第11図 1号墳根石実測図



第12図 1号墳石室土層断面図



第13図 1号墳石室側壁実測図

右壁の掘方壁面は底面からほぼ垂直に立ち上がる。奥壁と左壁は、ほぼ垂直に立ちあがり、上端部分が斜め外側に開く。

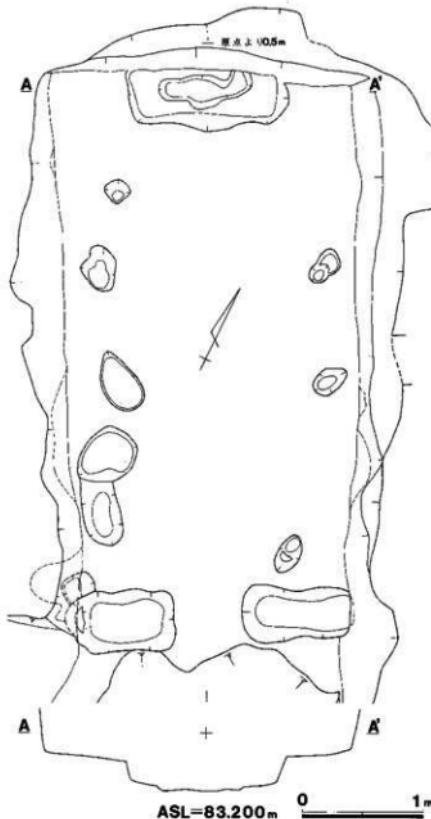
掘方の現存長は上場で約5.5m、下場で約5mを測る。

掘方上場の幅は奥壁部分で約2.7m、中央部分で約2.8m、玄門部分で約2.6mを測る。下場の幅は、奥壁部分で約2.5m、中央部分で約2.4m、玄門部分で約2.25mを測る。

掘方の深さは、奥壁部分で約2.3m、右玄門部で約0.9m、左玄門部で約1.3mを測る。

主軸ライン上で開口部分は、奥壁部分より約0.2m低くなる。

左右の側壁は、部分的にえぐられている。このえぐりのうち右壁の中央から玄門部分のものは、根石の輪郭と一致する。一方、左壁の中央部分は、根石が壁面に届かないにもかかわらず、えぐられている。



第14図 1号墳石室掘方実測図

天段 2号墳（第15図）

1) 立地

1号墳が南からはいり込む谷の最奥部に築かれているのに対し、2号墳は1号墳より谷の入り口に近い位置に築かれている。換言すれば、1号墳より沖積平野に近いところに位置していると言える。

古墳の南半分と東側をすでに削り取られて失っているため古墳全体の標高は知り得ないが、古墳の北半分は標高81.5m～83.4mの斜面に位置している。

2) 墳丘

この古墳は、丘陵斜面に周溝を掘削することによって形作られたものである。したがって、墳丘上のセンターは周溝をはさんで、周溝外のセンターと無理なくつなぐことができる。

現存の古墳の規模は、東西方向において、墳丘上では約10.4m、周溝の内側の下場間では約10.6m、周溝外側から外側では約13.8mを測る。

墳丘上は茶園改植によってすでに削平されていたためか、盛り土は全く認められなかった。

墳丘の形は現状では台形を呈する。

3) 周溝

周溝は、残存する墳丘をとりまく形で検出された。周溝の規模は、北（第4図のD-D'間）では幅約1.8m、深さは約0.25mを測り、B-2ポイントの西では幅約2.15m、深さ約0.5mを測る。

4) 内部施設（第16図）

2号墳の内部施設は、掘方は残存していたが、掘方内には根石ひとつ見当たらなかった。しかし、玄門・側壁の根石の一部・奥壁の掘方は確認できた。これにより、2号墳の内部施設も1号墳同様、横穴式石室と考えられ、両玄門の掘方が側壁根石の掘方より内側にたるため両袖式の石室と思われる。位置

古墳の南半分・石室の羨道・前溝を欠く状態での検討であるが、現状では玄室の掘方の中心が古墳のほぼ中心である。

掘方

掘方の主軸方位はN-22°-Wを測る。掘方の現存長は約4.4mを測る。掘方の上場の幅は、奥壁部分で約2.6m、中央部で約2.7m、玄門部分で約2.6mを測る。掘方下場の幅は、奥壁部分で約1.95m、中央部で約2.4m、玄門部分で約2.4mを測る。掘方の深さは、奥壁部分で約1m、玄門部分で約0.6mを測る。主軸ライン上で、玄門の掘方の中心から奥までは、約3.85mを測る。左右の玄門の掘方の中心から中心までは約1.3mを測る。

ii) 柱穴状遺構

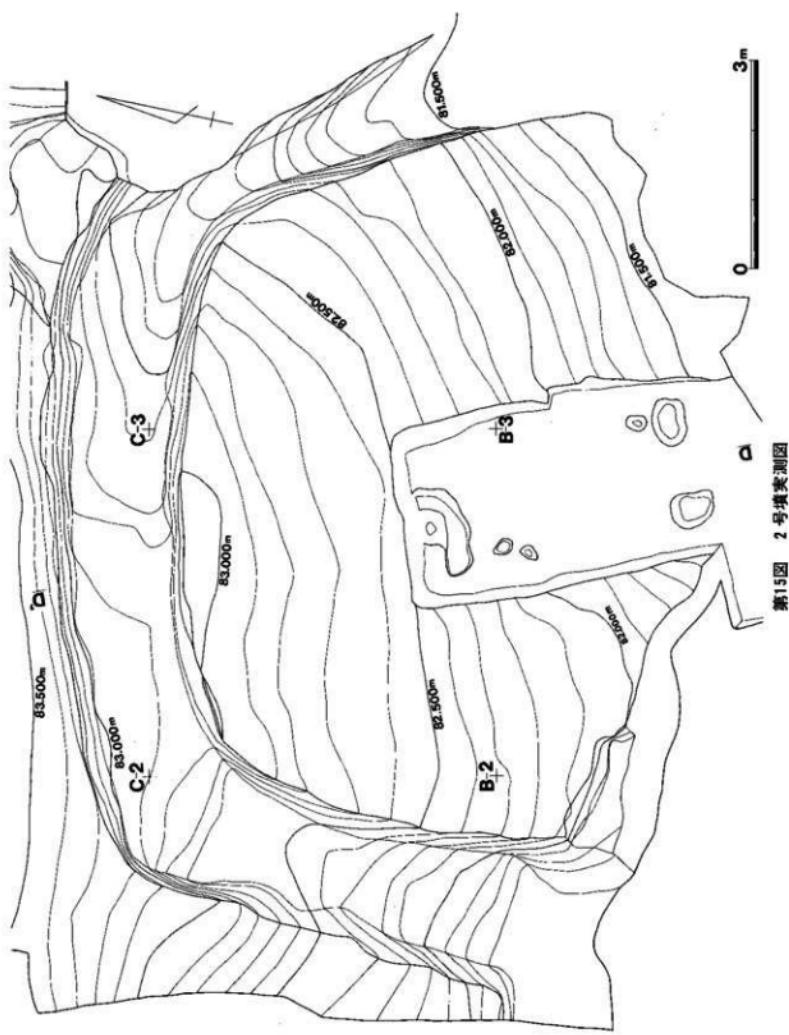
調査区の北端のG-6・G-7区、南端のB-4・B-5・C-4区からまとまって検出された。

G-6・G-7区内で検出された柱穴状遺構は、直径約0.3m～0.45m、深さ約0.1～0.15mと規模が小さく、浅いものであった。遺構の覆土は、茶褐色土・暗褐色土・黒褐色土に分かれるが、同じ覆土のものでも並ぶことはない。

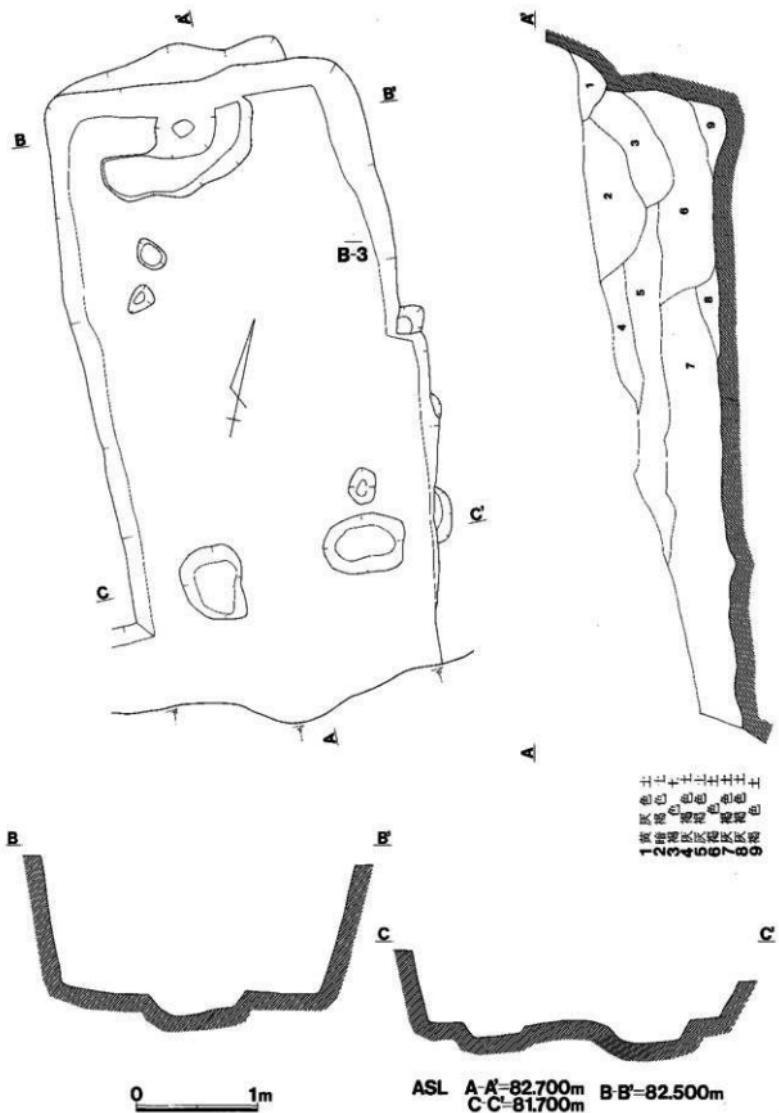
時期は、弥生時代後期の土器が混入する斜面堆積土を掘り込んでいるものが存在することから、弥生時代後期以降と考えたい。

B-4・B-5・C-4区内で検出された柱穴状遺構は、直径約0.2～0.4m、深さ約0.1～0.2mと浅く、小穴と言ふべきかもしれない。

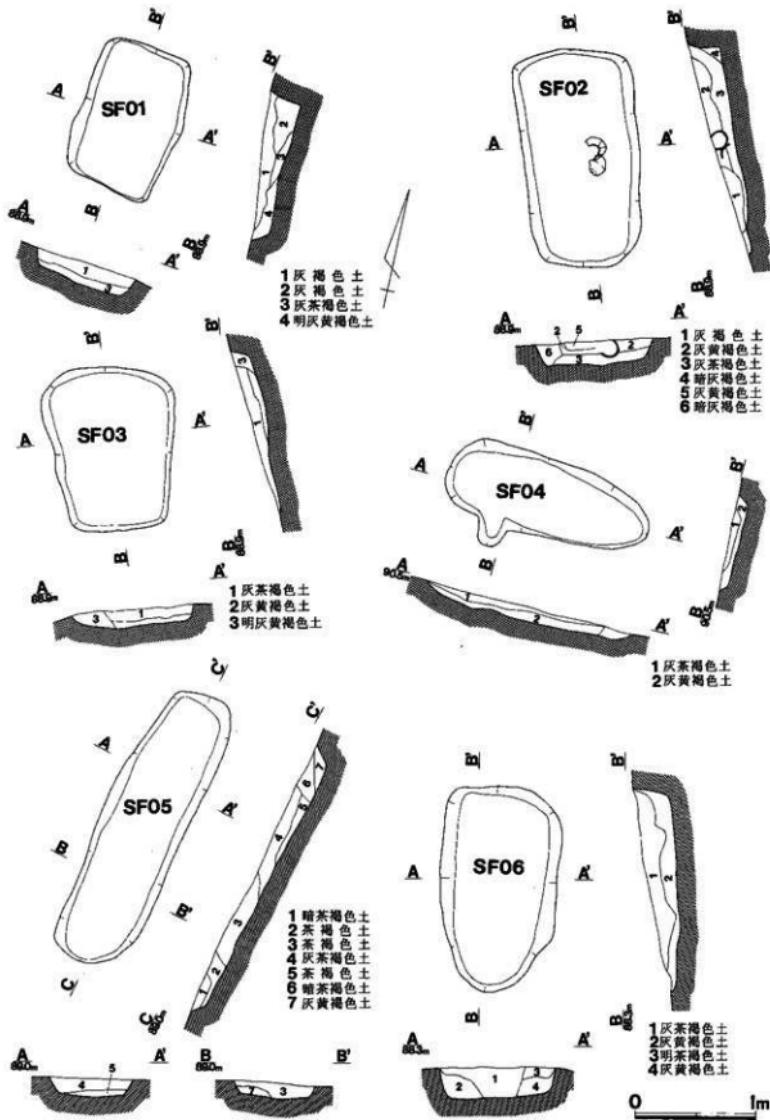
時期の決め手を欠くが、天段 2号墳の墳丘上の遺構は、古墳築造以前のものと考えたい。



第15図 2号填溝測図



第16図 2号墳主体部掘方実測図



第17図 土壌実測図

iii) 土壙 (S F)

土壙は、丘陵頂部にあたる調査区の北端から6基が検出された。

調査区の北端、標高90.5mを測る平坦面で1基(S F 04)が検出された。このS F 04から南に約4mさがったところから1m南までは傾斜が急になるが、この部分から溝状遺構S D01(幅約0.5m、長さ約2m、深さ約0.25m)が検出された。この急斜面部分は、調査時には遺物包含層は失われていて、地山の上に表土が存在する状態であったが、表土と地山の境から第20図-29・30の土器が出土した。ここでは、S D 01もS F 04に関連する遺構と考えておく。

S F 04から南に約7mさがった標高88.5m～88.8mの緩斜面で3基(S F 01～S F 03)が群集した状態で検出された。さらに、S F 03から約5m東の標高88.8m附近で1基(S F 05)が、S F 05から約20m東の標高88.1m附近で1基(S F 06)が検出された。

以下、S F 01～S F 06の概要を記す。

S F 01 (第17図)

G-4区内で検出された。幅約0.8m、長さ約1.2mの長方形を呈する。主軸方位はN-6°-Eを測る。確認面からの深さは、北端で約0.3m、南端で約0.1mを測る。掘方の底面は、中央より南が低くなる。

土壙内の北東部分より長さ3mmのガラス小玉が出土した。

S F 02 (第17図)

S F 01の東約1mで検出された。幅約0.95m、長さ約1.8mの長方形を呈する。主軸方位はN-17°30'-Wを測る。確認面からの深さは、北端で約0.25m、南端で約0.03mを測る。土壙内の中央やや東寄りの3層上面より壺形土器の底部から体部にかけての破片が出土した。

出土した土器より弥生時代後期の遺構と考えられる。

S F 03 (第17図)

S F 02の東約0.2mで検出された。幅約0.95m、長さ約1.35mの長方形を呈する。主軸方位はN-18°-Wを測る。確認面からの深さは、北端で約0.15m、南端で約0.01mを測る。掘方の壁面はほぼ垂直に立ちあがる。掘方の底面は、南端が北端より約0.15m低くなっている。

土壙内の北東部分より第21図-2の管玉が、覆土中より弥生時代後期の土器片が出土した。

S F 04 (第17図)

調査区の北端、I-5区内で検出された。幅約0.65m、長さ約1.7mの長楕円形を呈する。主軸方位はN-84°30'-Wを測る。掘方の壁面は緩やかに立ちあがる。

覆土中からの出土遺物はなかった。

S F 05 (第17図)

H-6区内で検出された土壙で、幅約0.7m、長さ約2.4mの長方形を呈する。主軸方位はN-13°30'-Eを測る。確認面からの深さは、北端で約0.15m、南端で約0.1mを測る。掘方の壁面は緩やかに立ちあがる。掘方の底面は、南端が北端より約0.03m低くなっている。

覆土中より弥生時代後期に比定できる土器片が出土した。

S F 06 (第17図)

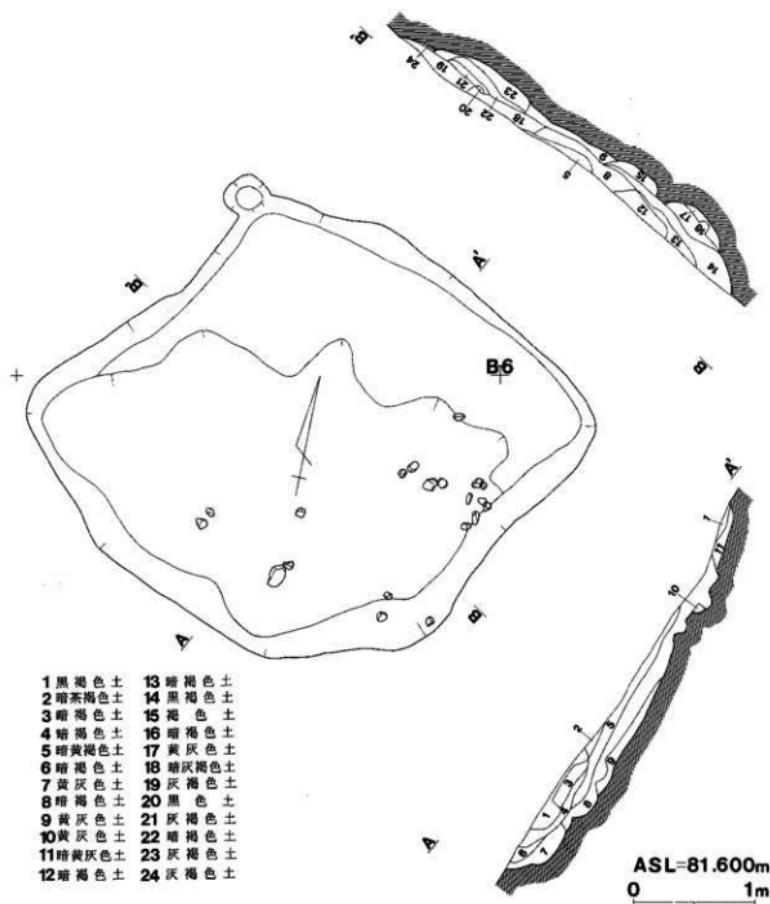
F-10区内で検出された土壙で、幅約0.95m、長さ約1.7mの長方形を呈する。主軸方位はN-7°-Wを測る。確認面からの深さは、北端で約0.3m、南端で約0.04mを測る。掘方の壁面はほぼ垂直に立ちあがる。掘方の底面は、南端が北端より約0.04m低くなっている。

覆土の水洗作業において第21図-3のガラス小玉が出土した。

iv) 性格不明な遺構 (S X)

S X 01 (第18図)

調査区の南端、天段1号墳の玄門より約5m南で検出された平行四辺形を呈する遺構で、1辺の長さ約3.5mを測る。遺構内の覆土中には直径0.1m内外の自然礫が混入していたが、凝灰岩が1点混じっていた。天段1号墳との関連は明らかにできなかった。



第18図 S X 01実測図

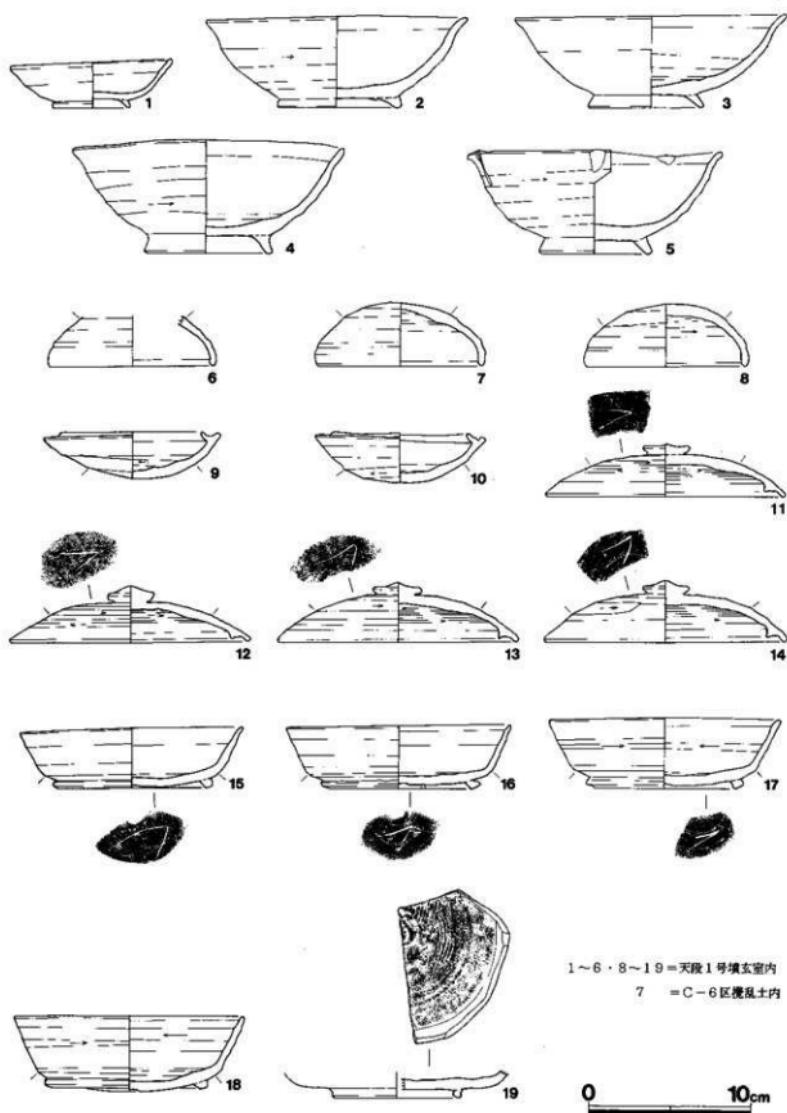
2. 遺物

今回の調査では、天段1号墳の石室内から山茶碗、須恵器、土師器、玉、鉄釘が出土し、土壙からは土器、玉類が出土した。また、天段1号墳の石室掘方内、周溝内からも弥生土器が少量出土した。ここでは、これらの遺物を、土器、玉類、鉄釘の順序で概略を述べたい。

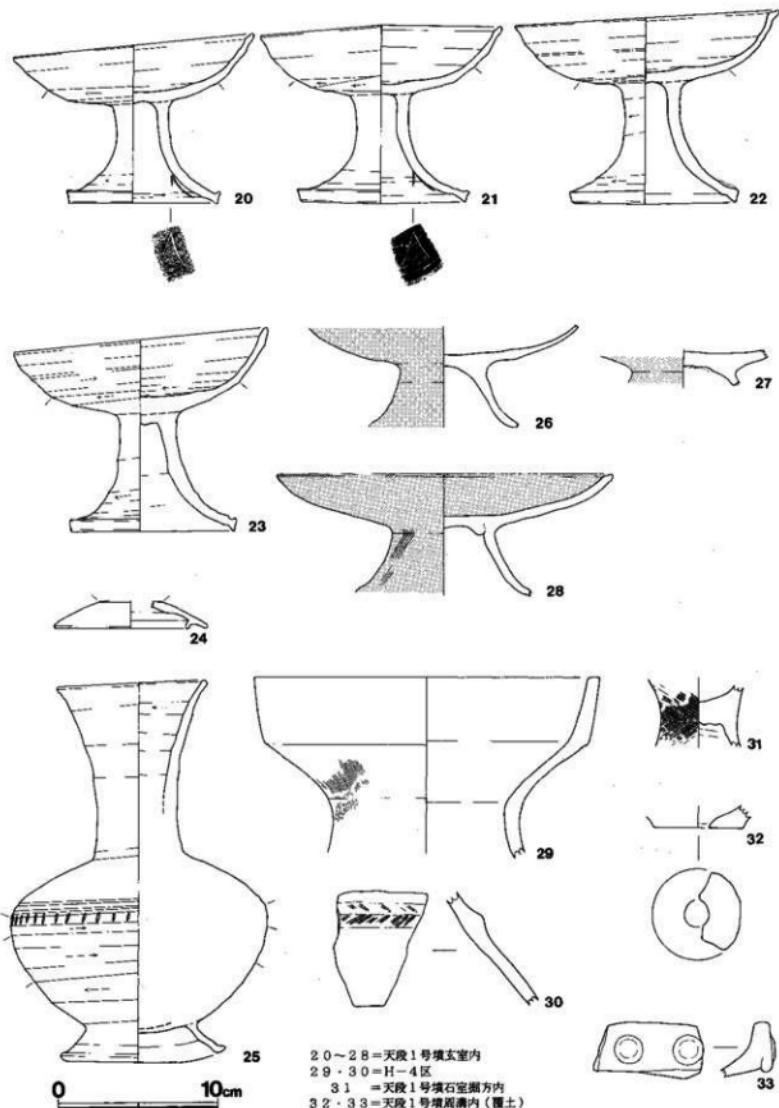
i) 土器（第19図～第20図）

第19図1～5は、天段1号墳の玄室内から出土した小碗・山茶碗である。

1は、口径10.4cm、器高2.9cmを測る小碗で、色調灰色を呈する。底部内面の中央は盛り上がり、口縁端部を丸く作る。底部外面に糸切り痕と爪形圧痕が残る。2は、口径16.1cm、器高5.7cmを測る山茶碗で、器壁を厚く作る。口縁部を軽く外反させる。体部の外面には逆時計まわりのノタ目が残る。底部外面に糸切り痕を残し、高台端部には初般痕が付着する。体部の内外面に煤が付着する。3は、口径16.8cm、器高5.8cmを測る山茶碗で、底部の内面から体部内面にかけて逆時計まわりのノタ目が残る。底部外面に糸切り痕を残す。高台は「ハ」の字に開く。高台端部は研磨が施される。4は、口径16.8cm、器高7.05cmを測る大ぶりな山茶碗で、器壁を厚く作る。体部外面に逆時計まわりのノタ目が顕著に残る。底部外面に糸切り痕を残し、高台端部に研磨が施される。器形にゆがみがみられる。5は、口径15.8cm、器高6.4cmを測る輪花碗である。5輪花のうち4つまでが指押さえによるもので、残る1つは指押さえと棒状工具による沈線が施される。体部外面には逆時計まわりのノタ目が顕著である。底部外面に糸切り痕を残し、高台端部、研磨が施される。体部外面に煤が付着する。6～8の縦は、ヘラ状工具による凹線で表現される。口径は、6・7が10.4cm、8が10.2cmを測る。9の环身は、口径10.0cm、最大径10.9cm、器高2.9cmを測る。10の环身は、口径9.75cm、最大径10.55cm、器高3.1cmを測る。11～14の环蓋、15～17の环身、20・21の高环には、同一のヘラ記号「く」が存在する。天井部外面に同一のヘラ記号を有する环蓋の法量は、11が口径13.5cm、最大径14.8cm、器高3.25cm、12が口径13.5cm、最大径14.85cm、器高3.5cm、13が口径13.6cm、最大径14.9cm、器高3.7cm、14が口径13.7cm、最大径15.1cm、器高3.85cmを測り、あまりにも近似した数値に驚きを覚える。底部外面に同一のヘラ記号を有する环身の法量は、15が口径13.8cm、器高3.8cm、16が口径13.8cm、器高3.9cm、17が口径14.3cm、器高4.4cmを測る。なお、石室内の出土状況は、15の环身の上に11の环蓋が裏返して載せられ、16の环身の上に13の环蓋が裏返して載せられていた。18の环身は、口径14.2cm、器高4.6cmを測る。底部が高台端部より下方に出る点が、15～17の环身と異なる。底部外面は生焼けに近い状態で、すでに器表が剥落していて、ヘラ記号は現状では認められない。15～17の环身とは、ヘラ記号が確認できない、底部が高台端部より下に出るという相違点を有するが、その他の形態、技法が全く同じであることから、15～17と同一時期の物と考えられる。19の环身底部は、底部が平坦で、底部の中央寄りに高台が付けられている。底部の内面中央に同心円の当て具の痕跡が残る。19の土器は、形態・技法とも15～18の土器と異なり、また、出土状況も他の环身より約0.4mも上からの出土であり、15～18とは時期を異にするものと思われる。脚部内面に同一のヘラ記号を有する高环の法量は、20が口径15.0cm、底径9.65cm、器高10.55cmを測り、21が口径15.1cm、底径10.8cm、器高11.1cmを測る。形態の上で差異は認められない。22は、口径16.5cm、底径10.5cm、器高12.1cmを測る。口縁端部はほぼ水平に作られる。环外部にわずかながら稜が認められる。23の高环は、口径15.95cm、底径10.4cm、器高12.5cmを測る。口縁端部は垂直気味に立ちあがる。环外部にわずかな稜が認められる。脚端部の上面には鋸い稜がつく。22・23の高环は、20・21の高环よりひとまわり大きく环部に稜をもつなど形態も異なるが、積極的に20・21とは時期を異にするとは言い切れないし、また同一時期とも言えない。24は、25の長颈壺の蓋



第19図 出土土器実測図（1）



第20図 出出土器実測図 (2)

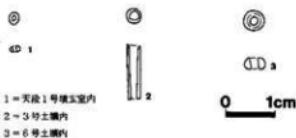
で、口径8.0cm、最大径9.6cmを測る。つまみを欠損する。外面に深緑色の自然釉が付着する。25は、口径9.35cm、体部の最大径16.05cm、器高23.7cmを測る脚付長頸壺で、体部的最大径に工具による刻みを配する。また、最大径の直上に2条の淡い沈線を巡らせる。26~28は土師器高环で、26・27の外面、28の外面と坯部内面に赤彩が残る。28は、口径21.0cm、器高は現存で7.55cmを測る。脚部外面に刷毛目が残る。29は壺の口縁部であるが、歪みが著しい。頸部に縱の刷毛目が残る。30は壺の肩部で、断面三角形の凸帯を有する。凸帯上に櫛状工具による羽状刺突文が施される。31は高环接合部で、櫛状工具による羽状刺突文が施される。32は壺底部で、中央に推定の直径約1.4cmの焼成前の穿孔がある。33は、折り返し口縁の壺で、円形貼付文が施される。

ii) 玉類 (第21図)

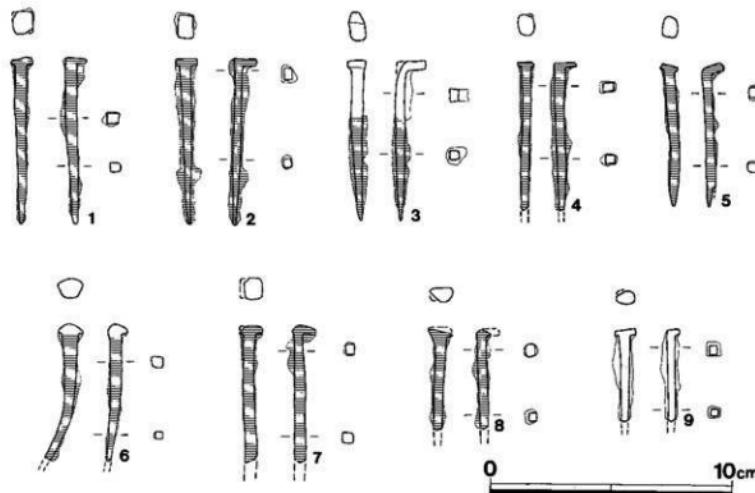
1は、直径2mm、長さ1.5mmの小玉でピンク色を呈する。材質は不明である。2は、直径3mm、長さ1.2cmの石製の管玉で、灰色を呈する。3は、直径4mm、長さ2.5mmのガラス小玉で青色を呈する。

iii) 鉄釘 (第22図)

鉄釘は、天段1号墳の玄室内から10点以上が出土した。図示した9点は全て頭部をL字形に曲げたものである。6の頭部は丸く作られているが、他は頭部を平坦に作る。釘の長さは、1・2が6.9cm、3が6.65cmを測る。9を除く8本に木質が残存していた。このうち、1・2・4・5・6は木目が釘に直交しているが、3は釘と平行する縦方向の木目と思われる。7の木目の方向は不明である。



第21図 出土玉類実測図



第22図 1号墳出土鐵釘実測図

IIIまとめにかえて

今回の発掘調査の結果および、成果から生じた新たな疑問点を提示することによってまとめにかえたい。

まず、土壙墓の検出が挙げられる。6基検出された土壙墓は、丘陵頂部に築かれたS F04と斜面に築かれたS F01～S F03、S F05・S F06に分けられる。S F04とS F01～S F03、S F05はその立地から、S F01～S F03、S F05はS F04に隸属しているように思われる。にもかかわらず、S F04からの出土遺物は皆無で、逆にS F01からはガラス小玉、S F03からは管玉が出土しているのである。

これらの土壙墓の時期は、H-4区から出土した第20図-29・30やS F02の供獻用土器から弥生時代後期と考えられるが、この時期の墓制について再考を要すると言えよう。

また、今回集中して土壙墓が検出されたことから、近くに住居跡が存在する可能性が大である。調査区内のG-6・G-7区、B-4・B-5・C-4区から検出された柱穴状遺構は、浅い上に並ばない。のことより、住居跡はやはり、調査区外に求められると考える。

次に横穴式石室について触れてみたい。今回検出された2基の石室墳の時間的な前後関係について知る術は全くないため、知り得ないが、この2基を少しばかり比較してみる。1号墳と2号墳の石室掘方の規模はほとんど同じであるが、古墳の規模は4mほど1号墳の方が大きい。墳形は2号墳が左右対称形であるが、1号墳は左右対称にならない。2号墳は、玄室の掘方の中心が古墳のほぼ中心になるのであるが、1号墳の場合は、墳形が不整形であるため、古墳の中心となる位置を定めがたいが、おおよそ、掘方の北端の左壁と奥壁の間にくるようである。小さな古墳の方がより厳密な企画に基づいているということは何を意味するのであろうか。手がかりのないのが残念でならない。

横穴との関係についても触れてみたい。第1章第3節でも触れたが、天段古墳群の南約0.6kmには別所横穴群が存在する。このうちの1基が昭和57年に発掘調査され、6世紀末葉の須恵器が出土している。天段古墳群は、この別所横穴を見下す位置にあることから、支配者（天段古墳）と被支配者（別所横穴群）の構図が想起された。しかし、石室内から出土したのは、7世紀中葉（第19図-6・8～10）と7世紀第4四半期（第19図-11～18）の土器と玉・鉄釘であり、横穴内からの出土遺物と何ら変わらない。天段1号墳は、古墳の規模は大きいが、丘陵斜面に周溝を開削し、墳丘に当たる部分の傾斜を緩やかにしただけで、盛り土は石室掘方以南に限られるなど、墳丘に大きな労働力が費やされたとは思われない。しかし、石室構築に際してはかなりの労働力を要したものと思われる。約1トン～1.5トンもある天井石・奥壁の石を丘陵頂部まで運び上げたのだから。この石室構築に大掛かりな労働力を要する点が、横穴築造と異なる点である。石室構築に際して、この労働力をいかにして確保したかという点について、全くの想像であるが、石室を墓制とする集団（長福寺古墳群、天段古墳、海塚古墳群、小高古墳、石ヶ谷古墳群、美人ヶ谷古墳群）の協同作業であったのではなかろうか。

最後に、玄室内から出土した山茶碗は、藤澤編年の第II段階第3型式ないしは第4型式に位置づけられるものであり、湖西・渥美系と清ヶ谷をはじめとする東遠江系の山茶碗の併行関係を知り得る貴重な資料である。

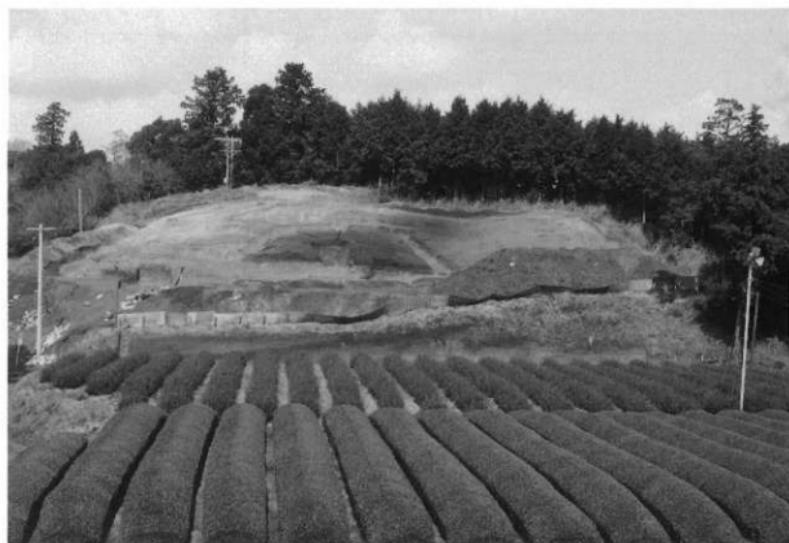
《参考文献》

- (1) 中尾芳治他『難波宮址の研究第7報告篇』大阪市文化財協会 1981
- (2) 森浩一他『マミシ谷窯址発掘調査報告書』同志社大学校地学術調査委員会 1983
- (3) 藤澤良祐『瀬戸古窯址群I』『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要I』瀬戸市歴史民俗資料館1982

図 版



天段古墳・東沢遺跡調査前全景（南より）



天段古墳・東沢遺跡調査全景（南より）



天段1号墳石室内天井石検出状況（奥壁方向より）



天段1号墳石室内遺物出土状況（南より）



1号墳石室全景（南より）



1号墳石室全景（南より）



1号墳石室内部全景（南より）



1号墳石室掘方全景（南より）



1号墳全景（南より）



1号墳（手前）・2号墳（奥）全景（東より）



天段2号墳石室掘方全景（南より）



天段2号墳全景（東より）



SF01-SF05全景（東より）



土塙・ピット群（東より）



1号墳玄室内発掘風景
(左壁方向より)



1号墳玄室内土層断面
(玄門方向より)



1号墳玄室内山茶碗出土状況(右壁方向より)



1号墳玄室内遺物出土
状況(奥壁方向より)



1号墳奥壁より棺台石
(玄門方向より)



1号墳玄門より棺台石
(奥壁方向より)



1号墳玄室床面状況
(玄門方向より)



1号墳玄室右壁
(玄門方向より)



1号墳玄室左壁
(玄門方向より)



1号墳奥壁部分
(玄門方向より)



1号墳奥壁裏土層
(玄門方向より)



1号墳奥壁根石
(玄門方向より)



1号墳右壁玄門
(南より)



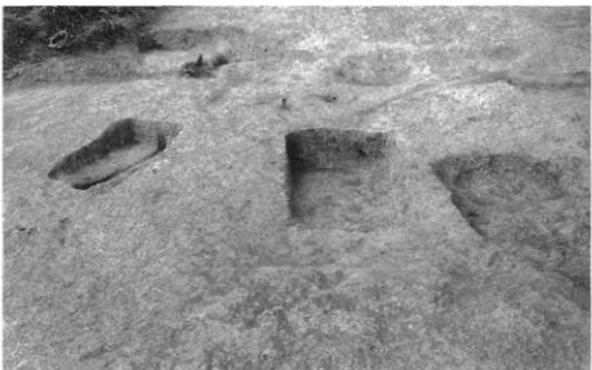
1号墳右壁玄門掘方
(東より)



1号墳左壁玄門
(南より)



SF02内遺物出土状況
(南より)

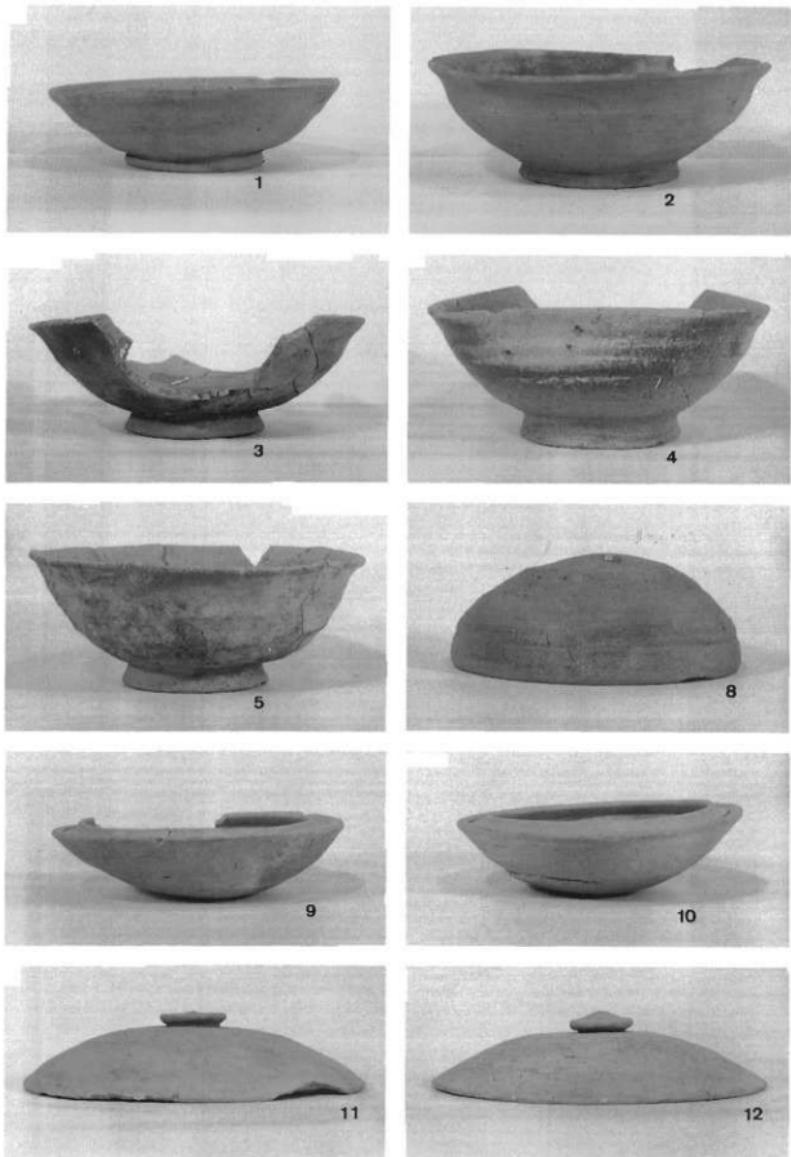


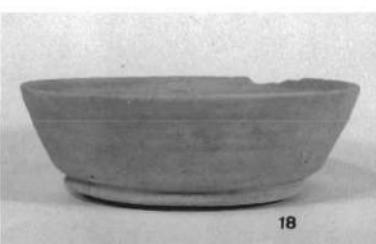
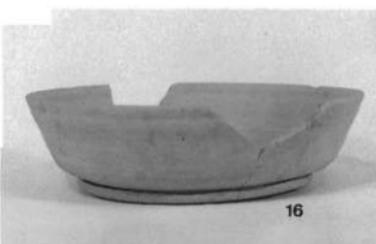
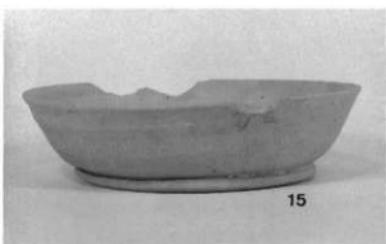
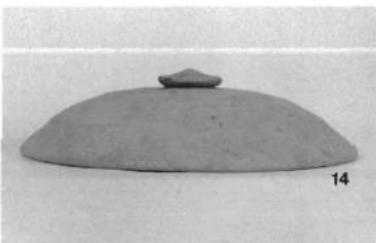
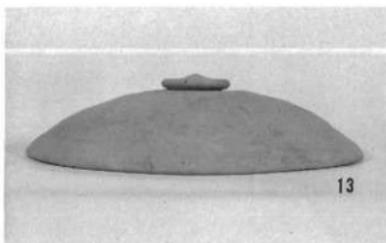
SF01・02・03全景
(南より)

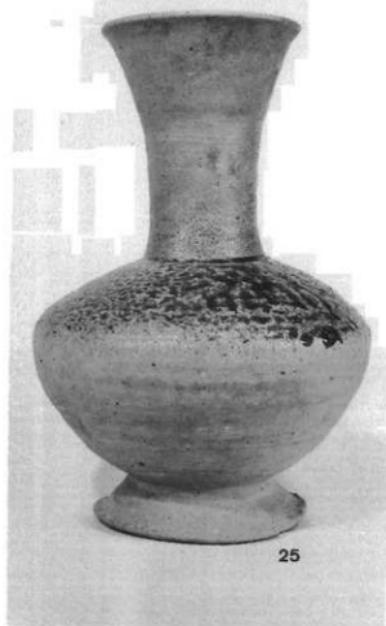


SF06全景
(南より)

図版
XIV



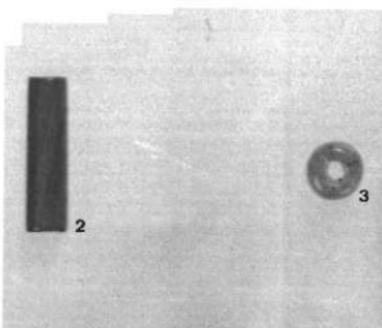




25



22



2

3



1

2

3

4

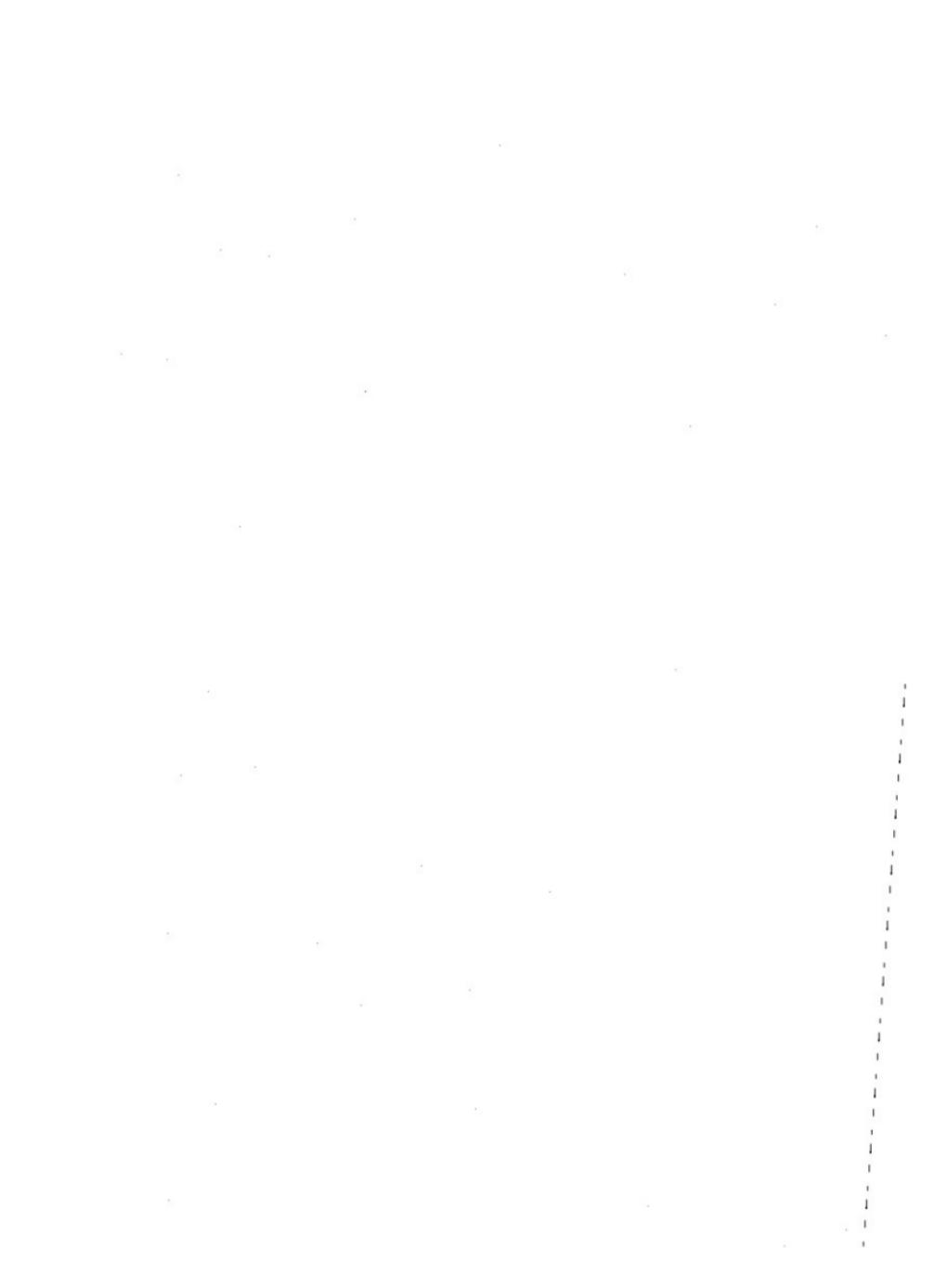
5

6

7

8

9



天段古墳・東沢遺跡

発掘調査報告書

平成元年3月31日 **257**

掛川市教育委員会

編集発行 掛川市水堀51
TEL(0537) 24-7773

株式会社 三創

印 刷 所 静岡市中村町166-1
TEL(0542) 82-4031

